

トピックス

第3回ホームカミングデイ開催

21世紀懐徳堂オープニングセレモニー開催

クローズアップ

地球社会のサステナビリティをグランドデザイン

ーサステナビリティ・デザイン・センターー



目次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	8
ナウススペシャル	16
キャンパスニュース	18
記念講義	29
表彰等	35
訃報	41
人事	42
インフォメーション	47
ガイドマップ	51
海外レポート	52
交流協定大学	54
クラブ&サークル	55
トピックス	56



表紙写真：入徳門聯（にゅうとくもんれん）

中井竹山の筆になる竹製の聯。聯とは漢文の対句を二つに分けて書き、壁や門などに左右相対して掛けたもの。「**カ**學以修己（学を力めて以て己を修め）**立**言以治人（言を立てて以て人を治む）」と読み、自己修養の大切さ、社会的活動（経世）の重要性という懐徳堂の基本精神を表しています。

[写真は、中之島センター1階の「懐徳堂」コーナー]

表紙デザイン：株式会社ココティエ

第3回ホームカミングデイ



熊谷信昭同窓会連合会会長（元総長）



大阪大学21世紀懐徳堂

本学の社会学連携事業の拠点として本年4月に新設された大阪大学21世紀懐徳堂のオープニングセレモニーとレセプションが、中之島センターにおいて5月27日(火)に開催されました。

詳細は、キャンパスニュース（27ページ）、大阪大学21世紀懐徳堂ホームページ（<http://21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp/>）をご覧ください。



開催

本年もいちょう祭の開催に合わせ、5月3日(土) 豊中キャンパス共通教育本館（イ号館）イ講堂並びに学生交流棟「宙」において、第3回大阪大学ホームカミングデイが開催されました。

本年は、同窓会連合会の入会者が増加したこともあり、卒業生の方々、教職員OB、名誉教授の方々など、これまでで最多の約230名の参加がありました。

詳細は、キャンパスニュース（23ページ）、同窓会連合会ホームページ（<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/dousoukai/top.html>）をご覧ください。



鷺田清一総長

オープニングセレモニー開催



トークセッション

（左から高島幸次招へい教授、河田 聡教授、平田オリザ教授）



開会挨拶

武田佐知子大阪大学21世紀懐徳堂学主（理事・副学長）



プレゼンテーション「大阪のメセナ活動～懐徳堂～」
（中央：湯浅邦弘教授）

ー7月の洞爺湖サミットテーマ「サステナビリティ」ー 地球社会のサステナビリティをグランドデザイン サステナビリティ・デザイン・センター（SDC）誕生

4月、全学共通・大学院高度副プログラム「サステナビリティ学」スタート

サステナビリティ・デザイン・センター（SDC）長 馬 場 章 夫

【サステナビリティ（Sustainability）ってなに？】

「環境の世紀」と呼ばれる 21 世紀。その科学技術や経済システムを語るキーワードが「サステナビリティ」（サステナ）。日本では「持続可能な地球社会」などと訳される。7 月日本が議長国で開催する洞爺湖サミットの主要議題でもあるこのテーマ。バイオ燃料、石油枯渇、温室効果ガスと連日のように報道されているが、こうした「環境」という言葉で語りつくせない広範囲の課題を取り上げるのが、このサステナビリティのチャレンジングな部分でもある。グローバリゼーションや経済成長等に伴い発生してきた地球温暖化をはじめとした環境汚染、食糧、医療（新型コロナウイルスなどによる感染症問題等）、政治経済、資源エネルギー、人口問題等を包括的に解決する道のりを将来の地球社会や国々の持続発展を妨げることなく、社会の福祉向上を図ることを目的とする。

【サステナビリティ学】

地球上の問題は、1) 地球システム（資源、エネルギー、生態系など）、2) 社会システム（経済・政治制度、産業構造、技術体系など）、3) 人間システム（個人のライフスタイル、健康、安全・安心、価値観など）のシステムの相互破綻に起因していると考えられ、そのメカニズムや原因を明らかにするなかで、持続可能性に関わる問題を包括的に究明する文理融合的な視点から考察する学術体系である。自分の専門知識に、さらにサステナビリティ問題に関する深い知識と広い視野を身につけ、専門知識をその解決にどう生かすかを修得するもので、地球社会の持続と向上に貢献する学術体系として注目されている。

■ SDC の誕生ー RISS から継承

サステナビリティ・デザイン・センター（SDC）＝写真＝は 2007 年 10 月、文理融合でパイオニア的な学問分野「サステナビリティ学」の初の全学教育研究施設として設立された。SDC は、「サステナビリティ学」の全部局横断組織として、本学総長のイニシアティブの下、2006 年 4 月に発足したサステナビリティ・サイエンス研究機構（略称：RISS、2010 年 3 月に文部科学省（JST）の拠点形成支援が終了。SDC は 2007 年 10 月から RISS を補完）を継承し大阪大学規定にもとづく恒久的施設として誕生したもので、複数の研究科・部局と連携し、今年度創設された大学院高度副プログラムとして「サステナビリティ学」を全学の博士前期課程の学生に提供している。一定の修了要件を満たせば本学総長と RISS 機構長（SDC 長）が発行する修了認定証が授与される予定。運営委員会には、



本学理事、関連部局長・センター長が名を連ね、同事業の実施や企画推進の決定を行う。

SDC の前身となる RISS は、文部科学省のスーパー COE プログラム、科学技術振興調整費・戦略的研究拠点育成事業（平成 17 年度採択）を実施する大阪大学、東京大学、京都大学、北海道大学、茨城大学の 5 大学で運営される世界最高水準のネットワーク型研究拠点「サステナビリティ学研究連携機構」（IR3S）の一つとして、サステナビリティ学を創設し、持続可能な社会や産業を形成することを目的に創立された。現在、SDC 長が RISS 機構長を兼ねている。

RISS は、「環境負荷を削減する産業技術開発と人類社会の持続可能性を導く研究・教育拠点」の形成を目的に、産業技術開発を進めるシナリオを構築する「サステナブル産業社会シナリオ構築ユニット」と、技術の評価と研究戦略に基づく研究マネジメントを行う「科学技術開発戦略ユニット」を核に、サステナビリティ・サイエンス・デザインハウスとして研究を推進してきた。2007 年度には、アジアで展開する研究構想「都市・農村の地域連携を基礎とした低炭素社会のエコデザイン」が環境省で採択された例を代表に、未来型のルネッサンス都市を目指す「低炭素型まちづくり構想」などの研究を進め、産学連携事業等で、具体的な成果を上げてきた。また、RISS では「コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）と協力し、科学技術コミュニケーションやサイエンスショップの活動を推進」し、RISS の全体統括が鷺田清一総長であることから、とりわけ、文理融合的連携も同時に深めてきた。

昨年 11 月には EU/J 関西と環境科学政策先進国・EU の専門家を招聘し＝写真＝、また今年 3 月には大阪ガスの中谷秀敏副社長、山折哲雄国際日本文化研究センター名誉教授、鷺田総長の話題提供に続いて、海外での都市再生で国連から高い評価を受けるドイツ・エムシャーパーク、スペイン・ビルバオの専門家＝写真＝を招聘した。国際社会の視点から見た都市産業社会のあり方を熱く論議。主要メディアにも大きく報道され、一般の関心も寄せられた。

世界におけるサステナビリティの研究教育拠点の構築も推進し、これまでアジア循環型社会の鍵を握る中国やベトナム等で国際シンポジウムや調査研究を重ねてきた。さらに 6 月末には潮州市で都市と農村の連携された持続発展を図るための調査研究を進め、9 月には国連大学ゼロエミッションフォーラムや中国国家発展改革委員会などとの共催で中国・杭州で日中共同国際シンポジウムを開催する予定で、国際連携を推進し、サステナビリティの国際社会の都市づくりをプロデュースしていく。



日本と EU の専門家がサステナビリティを議論



スペインの都市計画の第一人者、アレックス・ビルバオ市副市長

■ 大学院高度副プログラム「サステナビリティ学」開始

SDC の最大のミッションは、サステナビリティ学の教育プログラムの実施と推進による同分野の専門家育成と、その人材を国際的な市民・産業社会の様々な分野に送り出し、持続可能な社会形成に貢献することである。2008 年 4 月から大学院高度副プログラム「サステナビリティ学」をスタートさせた。本学では、大学院博士前期課程の学生を対象に幅広い分野の素養を身につけるとともに高度な専門性を獲得する機会を与え、近年の学問分野の学際化・融合化に対応し、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材を育成することを目的に同プログラムを創設。

SDC（2010 年 3 月までは RISS も含む）の兼任や特任教員に加え、企業、シンクタンク等の第一線の専門家で構成される講師により講義が行われ、東大や京大などの IR3S の大学間での単位互換制が実現する IR3S の大学間でのアジア初のサステナビリティ学教育科目（学学連携）としても位置づけられ、5 大学の共同修了証を発行する準備も整えている。また、関西大学の「環境会計」など特色ある科目を 2 科目と、大阪大学の次の先導、学域の 2 科目と相互に単位互換する取り組みも秋からスタートする。

プログラムは「先導科目」2科目、「アソシエイト科目」8科目、「学域科目」2科目の計12科目。例えば先導科目の「サステナビリティ技術・評価論」=写真=では工学、自然・社会・人間科学の観点から、サステナビリティ学の理論・手法を概観し、サステナビリティにおける具体的な問題を通じて、既存の理論・手法の有用性や限界を明らかにし、問題解決に必要な知識・方法を選択・統合する能力を身につけることを目指している。「地球温暖化の経済学」では地球温暖化問題とその対策を俯瞰的に考察する。具体的には、ポスト京都議定書や低炭素まちづくりプロジェクト、IPCC 報告書について分析し、途上国における温暖化問題、都市環境マネジメントなどのテーマで地球温暖化問題とその対策を俯瞰的に理解することを狙いとしている。

学域2科目は「持続可能システムデザイン」を工学研究科で新設し、「環境にやさしい機械の組み立て設計」、「持続可能なまちづくり」、「産業の環境管理」という異なるスケール・視点で概観し、エコタウン見学などのエクスカージョンも実施。人間科学研究科では既存の科目「環境と社会」を読み替える形で、持続可能性と人間の安全保障についてフィールドワークの視点から考察する。

また、国際的な学術交流によるカリキュラムや運営システムの刷新を目的に、2007年2月には欧米の専門家を招き、「サステナビリティ教育国際ワークショップ」=写真=を、今年1月には、MIT（マサチューセッツ工科大学）でSDCの教育プログラムを紹介、今後のカリキュラム向上などをテーマに活発な意見交換を行うと共に、5月にはMIT教授が講演した=写真=。



吹田・豊中キャンパス間をテレビ会議で遠隔講義する「サステナビリティ学」



海外のサステナビリティ教育の専門家が一堂に会した国際ワークショップ



MIT教授による米国最前線のグリーン・ケミストリーの講演

平成20年度サステナビリティ学科目群

選択必修科目（サステナビリティ学先導・学域科目）

授業科目名	研究科	開講時期	単位	開講キャンパス
サステナビリティ評価・技術論	工 学	2学期	2	吹田
経済学特論（地球温暖化の経済学）	経 済 学	1学期	2	中之島センター
持続可能技術システムデザイン	工 学	1学期	2	吹田
環境と社会特講（持続可能性、人間の安全保障）	人間科学	1学期	2	吹田

選択科目群（サステナビリティ・アソシエイト科目）

授業科目名	開講研究科等	開講時期	単位	開講キャンパス
環境心理学特講Ⅰ	人間科学	2学期	2	吹田
法政策学	法 学	2学期	2	豊中
特殊講義（開発と環境）	国際公共政策	2学期	2	豊中
生物環境工学特論	工 学	1学期	2	吹田
需要端エネルギーシステム工学	工 学	2学期	2	吹田
共生都市環境論	工 学	1学期	2	吹田
科学技術コミュニケーション入門	C S C D	1学期、 2学期	2	1学期 豊中 2学期 吹田
科学技術論B	理学／基礎工学	1学期	2	豊中

■ 地域に出て産学連携、社学連携

SDOC（サステナビリティ・デザイン・オンサイト研究センター）の役割

サステナビリティ研究・教育に関する社会的ニーズの探究と持続可能社会構築の発信基地となるのが、SDCの関連施設の実践的プラットフォームとして創立されたサステナビリティ・デザイン・オンサイト研究センター（SDOC、工学研究科附属。盛岡通センター長）。兵庫県と尼崎市が環境に配慮した工場の誘致を進めている尼崎市のウオーターフロント（臨海地区）に唯一、研究施設として進出した。近隣部に松下電器産業の世界最大のプラズマディスプレイ工場が誘致されたのを機に、最先端の技術を誇る製造業も名を連ねている。この地域は21世紀の森づくりをシンボルに環境再生を図り、持続可能社会を志向している。

SDOCの建物としても太陽光発電やグリーンウォール＝写真＝などで低炭素モデルを追求し、地域にも開かれた運営を行っている。企業、自治体、NPOなど多様なセクターとの連携に力を入れており、エコプロセスではバイオオイル開発で産業界との共同研究（政府からの外部資金）を行い、都市・住宅建築、モビリティ、エコデザイン、グリーン・福祉等の領域の研究企画に加え、ナレッジ部門では5月には「セキュアデザイン共同研究講座」を研究ユニットの核として開設。食品・医薬品の安全・安心、原本保障から広く産業製品の信頼構築をはかり、カーボン・オフセット認証などの企業活動のリスク・ガバナンスを形成する最先端研究をスタートさせた。



未来型産業地域社会のあり方を提言するサステナビリティ・デザイン・オンサイト研究センター（SDOC、尼崎臨海地区）

■ SDCの将来的ロードマップ

サステナビリティは、個別の「専門領域」ではなく、全ての研究学問分野の結集である必要がある。その取り組みには、スーパースター的な資質と能力が問われる。「コーディネーター」「行政官」「政治家」「技術者」の役割が演じられるスーパースターを短時間で育てることが求められている。非常にチャレンジングだが、残された時間はあまりない。本来、大学のミッションは人材育成にある。回り道のようなが、目標達成には、全ての資源を高いレベルの研究・教育に集中すること以外ないだろう。SDCの役割は、学生にサステナビリティに関するモチベーションを高く持たせて、様々な分野ごとの基礎力をつけさせる一方、一般社会で実学を身に付けた高い志を持った人材を受け入れていくことにあるのではない。

ばば・あきお

プロフィール

1976年、大阪大学大学院工学研究科石油化学専攻博士課程修了（工学博士）。三菱化成工業株式会社総合研究所を経て、現在、工学研究科教授、先端科学イノベーションセンター長。2008年4月から、サステナビリティ・デザイン・センター長、サステナビリティ・サイエンス研究機構長、工学研究科長・工学部長を務める。

役員室だより

2008.6 Vol.24

各室の検討状況

総合計画室

次期中期目標・中期計画の策定に向けて

平成22年度から始まる次期中期目標・中期計画を策定するにあたっては、まず、執行部において「阪大グランドプラン（仮称）」を作成し、それをベースに、次期中期目標・中期計画を策定することとしました。

「阪大グランドプラン（仮称）」は、阪大のこれからの教育、研究、大学運営、社会連携などの「中長期目標」と、それを実行していくための「アクションプラン」で組み立て、阪大の方向性や取り組みを構成員のみなさんに示していくこととしています。

また、次期中期目標・中期計画は、第一期の見直しや暫定評価の結果等も反映させながら、「阪大グランドプラン（仮称）」に基づき作成しますので、その作業のために、各室から選出された室員で構成する「次期中期目標・中期計画検討ワーキング」を立ち上げ、検討を始めました。

〈スケジュール〉

- ・20年9月～10月 阪大グランドプラン（仮称）の完成
- ・21年5月～6月 第2期中期目標・中期計画の完成
- ・時期未定 文部科学省への提出
- ・22年3月 平成22年度計画の作成・文部科学省への提出

教育研究環境の改善と施設整備

■平成19年度は、施設整備費補助金により老朽施設の耐震改修・機能改善改修を中心に施設整備されました。

文法経本館耐震改修



外周部

構造：鉄筋コンクリート造
規模：地上4階
延べ面積：10,158㎡
着工年月：平成19年10月
完成年月：平成20年3月



中庭部

文法経本館の耐震改修工事が完了しました。外周部については改修前のクラシックな文系のイメージをもつファサードを残しつつ、補強部位の立面バランスを計りながら格子形のダブルスキン工法としています。中庭部については外壁の近くの樹木（メタセコイヤ）を残し、柱梁付のピタコラム工法としました。平成20年度は引き続き内部の機能改修が実施されます。

産研第1研究棟耐震改修（Ⅰ期）



南面

構造：鉄筋コンクリート造
規模：地上5階
延床面積：10,955㎡
改修面積：4,380㎡
着工年月：平成19年10月
完成年月：平成20年2月



北面

産研第1研究棟の耐震改修のⅠ期工事が完了しました。Ⅰ期工事では、延床面積の約半分について耐震改修を行いました。建物の南面は、既設のファサードを保つためバルコニーは残し、補強の必要な部分については既設壁を撤去し、鉄骨枠付きブレース補強としました。また北面については、スパン毎に目隠しパネルを設置することで、設備配管類を隠した外観としています。

理学部本館耐震改修



構造：鉄筋コンクリート造
規模：地上5階
延床面積：20,021㎡
着工年月：平成19年8月
完成年月：平成20年3月

D棟
学生用コミュニケーションホール

平成14年度から3期にわたり実施していた理学研究科本館耐震改修工事が完了しました。3期工事では、共通部分が主にあるD棟を、機能が重視される研究ゾーン（b棟・c棟）とは雰囲気を変え、室内空間が廊下と一体化し通りかかる人にも、活動が伺えるようなデザインとしています。外観は、2期工事までのファサードを踏襲し、耐震補強と設備配管スペースを兼ねた格子状のRCフレームとアルミルーバーとを組合せた構成としています。

体育館耐震改修



構造：鉄筋コリト造・鉄骨造
規模：地上3階
着工年月：平成19年10月
完成年月：平成20年3月

体育館の常時運営を考慮し、建物外周部にて耐震補強工事が実施されました。鉄骨枠付ブレース補強を2・3階よりセットバックした1階外壁面の柱内にて行うことにより、現在のファサードをこわさずに、自然になじむものとしています。

歯学部附属病院本館改修

病棟、手術室等が新棟（E棟）へ移転した後のスペースを含め、平面計画の見直しに伴う改修が実施されました。廊下であった患者の待合を中待合とするため、待合室を整備するなど、利用者の環境向上を図りました。診療室・待合室は床を木目調にし、より親しみのある空間としています。また、空調・給排水・照明など設備の更新や外壁・屋上防水の改修を行い、インフラ面も改善しました。



待合室

待兼山修学館が、登録有形文化財に登録されました

豊中キャンパスの待兼山修学館が、平成20年3月に登録有形文化財（建造物）に登録されました。大阪大学では、平成16年の共通教育本館（イ号館）に続き、2件目の登録となりました。

（詳細については、ガイドマップ（51ページ）に掲載しています。）

教育・情報室

教育改革のための競争的資金

教育改革のための競争的資金を獲得することは、大阪大学にとってたいへん重要です。一大学あたりの申請件数が制限されることが多いため、教育・情報室ではヒアリングを実施し、大阪大学として申請する事業について決定するとともに、それぞれの申請をより優れたものとするための助言を行っています。

本年度の「大学院教育改革支援プログラム」としては、学内から8件の応募がありました。一大学からの申請が3件まで（このほか他大学との連携事業について1件）に制限されていますので、慎重な審議の結果、理学研究科、歯学研究科、工学研究科の3件と経済学研究科の1件を選び、大阪大学の事業として申請しました。また、現代GPと特色GPを統合した「質の高い大学教育推進プログラム」については、理学部、医学部医学科、薬学部、基礎工学部の4件を申請しました。「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」としては、医学系研究科保健学専攻の事業を選び、このほかにも「産学連携による実践型人材育成事業——サービス・イノベーション人材育成」や「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」などに応募しています。今後も各部局の積極的な対応をお願いします。

大阪大学ファカルティー・ディベロップメント（FD）研修

昨年度の大阪大学ファカルティー・ディベロップメント（FD）研修は、助教のみを対象に行いました。本年度は全教員を対象として9月に実施する予定です。共通教育賞受賞者の授業取組事例、大学院 GP による取組事例、他大学における FD 取組事例のほか、キャンパスライフ、メンタルヘルス支援、全学共通教育、サイバーメディアによる授業支援システムなどについて講演が行われる予定です。

大学設置基準の改正により、「大学は、授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする」とされています。よりよい教育を大阪大学として提供し優れた人材を育成することは、大学の社会的責任として何より重要です。可能な限り多くの教員が参加されることを期待します。

大学院高度副プログラム

『阪大 NOW』2月号で詳しくお知らせしていた〈大学院高度副プログラム〉が開始しました。「金融・保険」「臨床医工学・情報学融合領域」「ナノサイエンス・ナノテクノロジー」「コミュニケーションデザイン」「まちづくりデザイン学」「サステナビリティ学」など14の部局横断的プログラムに対し、修士500人以上、博士20人以上が履修登録しました。このほか社会人のための〈科目等履修生高度プログラム〉が4件動き出し、140人以上が受講登録しています。

このような部局横断的・学際融合的な大学院教育を進めることは、大阪大学独自の取組です。副専攻制度の本格的な実現に向けて、今後とも協力をお願いします。

障害学生支援室

本学は『障害学生支援室』を豊中地区と吹田地区に設置し、個別部局との連携の下で具体的な支援を実施してきました。これは本学が定める『障害を有する学生の支援に関する要項』に基づき、各種の障害を有する学生が障害を持たない学生と同じように学び学生生活を送ることができるよう支援を行うものです。

これまでは事務補佐員1名による体制でしたが、留保ポストによる助教1名を4月に採用し、学生の相談・支援体制を拡充するとともに、障害学生支援教育も担うことになりました。

学資金返還免除候補者の選考

大阪大学第一種学資金返還免除候補者選考委員会が4月16日に開かれ、独立行政法人日本学生支援機構の第一種学資金の返還免除候補者を決定しました。博士前期課程229名、博士後期課程99名、専門職大学院課程17名を、本学の学資金返還免除候補者として推薦しました。日本学生支援機構の認定委員会により、全額免除及び半額免除の認定が行われます。

卒業式と入学式

これまで卒業式と入学式は、吹田地区体育館とコンベンションセンターにおいて複数回に分けて行われてきましたが、平成21年3月以降の卒業式と入学式は、それぞれ学外の施設で学部生、大学院生、父兄等が一同に会する大規模な式典としてとり行なうことになりました。日程と場所は以下のように予定しています。

平成20年度卒業式 平成21年3月24日 大阪市中央体育館（大阪市港区）

平成21年度入学式 平成21年4月1日 同上

平成21年度卒業式 平成22年3月23日 大阪城ホール（大阪市中央区）

平成22年度入学式 平成22年4月5日 同上

研究・産学連携室

平成20年度科学研究費補助金の採択状況（速報値）

本年度における科学研究費補助金の採択件数・配分額は、全国4位となっています。
 なお、上位7大学については以下のとおりです。

（金額単位：千円）

機関名	採 択 件 数	配 分 額	間 接 経 費	合 計
東 京 大 学	2,745	15,618,959	3,131,358	18,750,317
京 都 大 学	2,234	10,836,963	2,346,034	13,182,997
東 北 大 学	1,872	7,861,560	1,826,208	9,687,768
大 阪 大 学	1,863	7,591,953	1,540,636	9,132,589
九 州 大 学	1,360	4,498,290	989,967	5,488,257
名 古 屋 大 学	1,315	5,105,180	1,073,754	6,178,934
北 海 道 大 学	1,263	4,537,996	1,072,709	5,610,705

※平成20年度（新規採択＋継続分）における採択件数・配分額

科学技術振興調整費の採択状況

総合科学技術会議のイニシアティブの下、我が国の科学技術政策上の重要な課題を解決するために用いられるトップダウン型の競争的資金であり、本年度は以下の課題が現在までに研究代表機関として採択されました。

	プログラム名	提 案 課 題
1	若手研究者の自立的研究環境整備促進	「生命科学研究独立アプレンティスプログラム」
2	イノベーション創出若手研究人材養成	「協働育成型イノベーション創出リーダー養成」

グローバルCOEプログラムに関するヒアリング

グローバルCOEプログラムに関して本学からの申請11件（新規提案5件及び継続提案6件）に対し8件が文部科学省におけるヒアリング実施課題となったことから、その対策として学内ヒアリングを4月下旬に実施し、各拠点リーダーに助言を行いました。

研究費等の不正使用の調査に関する取扱い

平成19年2月に文部科学省で策定された「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」に基づき、本学では同年11月に研究費を適正に管理するため、「国立大学法人大阪大学における競争的資金等の取扱いに関する規程」や体制を整備しましたが、同規程第13条に規定する不正使用があった場合等における調査を行う委員会及び調査に係る取扱いを規則化した「研究費等の不正使用に係る調査等に関する取扱い規則」の制定に向けて検討しています。

研究戦略ワーキングの見直しと新たな研究戦略ワーキングの学内公募

研究・産学連携室（旧：研究推進室）の下に設置し活動を行ってきた生命科学・生命工学分野、ナノサイエンス・ナノテクノロジー分野、理工学分野、文系分野、文理融合分野の5つのワーキンググループを見直すと共に新たな研究戦略ワーキングを学内公募することによって、学内研究者の希望を重視し、改めて本学の中長期的研究戦略として、1) 部局横断型研究の推進、2) 第三期科学技術基本計画等への対応、3) 文部科学省、科学技術振興機構（JST）等を始めとする各種プロジェクト公募への対応等を視野に入れた活動を続けていきます。また、昨年度は、部局横断型の研究プロジェクト支援経費により12件のシンポジウム等を開催しましたが、本年度においても同様の支援を行うこととしています。

評価室

国立大学法人の中期目標期間に関する評価（暫定評価）

平成20年度に行われる国立大学法人の中期目標期間に関する評価（暫定評価）においては、『教育研究評価』と『業務実績評価』の両方に対応する必要があることから、平成19年夏以降、関係各部局、各室等におかれては、例年にまして、多大なご尽力ご協力をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

【教育研究評価】

文部科学省に設置された「国立大学法人評価委員会」からの要請を受け、(独)大学評価・学位授与機構が、各国立大学法人等の中期目標・中期計画に記載されている基本単位（大阪大学の場合、教育：26単位〈11学部、15研究科〉／研究：24単位〈学部・研究科、附置研究所、全国共同利用施設〉）に関する現況調査・分析を行い、これらを勘案して、国立大学法人の「教育研究等の質の向上」に係る中期目標の達成状況の評価を行うものです。

まず、関係各部局には、「現況調査表（教育／研究）」の作成、修正をお願いしました。

一方、法人として提出する中期計画の教育・研究・社会貢献等（計画番号1～135）に関する「中期目標の達成状況報告書」の作業を関係各室（教育・情報室、研究・産学連携室、国際交流室）をお願いしました。

なお、研究・産学連携室には、「法人として重点的に取り組む領域」（計画番号78）に関連するプロジェクトの選定及び各プロジェクトに係る研究業績説明書のとりまとめをお願いしました。

現在、評価室において、最終確認等を行っており、6月末に(独)大学評価・学位授与機構に提出します。

提出後は、書面調査、訪問調査を経て、(独)大学評価・学位授与機構の「評価結果」が、平成21年2月頃に公表される予定です。その際、本学から提出した「現況調査表」及び「達成状況報告書」も併せて公表されます。

【業務実績報告書】

今年度は、「平成19事業年度及び中期目標期間（平成16～19事業年度）に係る業務の実績に関する報告書」を6月末に文部科学省に提出します。

なお、「I業務運営・財務内容等の状況」に関する事項及び「附属病院」に関する事項については、国立大学法人評価委員会において、平成19事業年度の評価（年度評価）及び平成16～19事業年度の4年間一中期目標期間評価が行われます。

「教育研究評価」の結果公表後、国立大学法人評価委員会において、国立大学法人大阪大学に係る業務の実績の総合評定（暫定評価）が決定・公表されます（平成21年3月予定）。

法科大学院認証の受審

認証評価とは、学校教育法上、大学の質を保証することを目的として、大学が一定期間ごとに文部科学大臣から認証を受けた評価機関による評価を受け、その評価結果を踏まえて、教育活動等の改善に役立てるための制度です。大学全体が対象となる「大学機関別認証評価」と特定分野の大学院が対象となる「専門職大学院認証評価」の二種類があります。

今年度、大阪大学大学院高等司法研究科が受ける法科大学院認証評価は、専門職大学院認証評価の一つで、法科大学院の教育活動等の状況が評価基準に適合しているか否かの認定を通じて、その質を保証することを目的としています。法科大学院認証は、5年に一度、認証評価を受けることが義務づけられております。本学は、認証評価機関として、(独)大学評価・学位授与機構を選択しています。

評価室と高等司法研究科が連携を図りながら、自己評価書を作成し、6月末に同機構あて提出します。

財務室

中長期予算の在り方検討ワーキング及び基金検討ワーキングの設置

本年度から、本学の中長期的な将来構想を踏まえ、重点施策の実現に必要な財務基盤の整備を図るため、総長を本部長とする財務基盤整備本部が設置されました。これを受けて、財務室では、中長期的な視点に立った財政基盤の整備及び、次期中期目標・中期計画策定のための具体的な方策を検討できる体制を速やかに構築する必要があるため、既存の「資金運用ワーキング」に加えて、その他のワーキング（財務運営に関する検討WG、予算配分の在り方検討WG、財務情報WG）を発展的に解消し、新たに「中長期予算の在り方検討ワーキング」及び「基金検討ワーキング」を設置いたしました。

今後、新たな二つのワーキングを財務室会議に合わせて開催し、集中的に議論を重ねていく予定ですので、学内の皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

人事労務室

新たな障害者雇用への取り組み－障害者雇用促進法に基づく障害者雇入れ計画の推進－

「障害者の雇用の促進等に関する法律」には、「すべて事業主は、身体障害者又は知的障害者の雇用に関し、社会連帯の理念に基づき、適当な雇用の場を与える共同の責務を有するものであって、進んで身体障害者又は知的障害者の雇入れに努めなければならない。」と規定されています。本学としても、その責務を果たすため、障害者の雇用に積極的に取り組んでいく必要があります。

その取り組みの一つとして、このたび6月1日付けで、14名の知的障害者の方を用務補佐員として採用しました。また、これらの方々の業務が円滑に行われるようにするため、一緒に作業を行いながら支援を行う非常勤職員を6名別途採用しています。支援にあたる人たちといくつかのチームに分かれて、吹田キャンパスのメインストリートを中心とした清掃業務等を行っています。これから学内の環境美化に大いに力を発揮してくれるものと思っています。皆様も構内で作業を見かけることがありましたら、応援くださるようお願いします。

なお、今後、清掃業務以外にも新たな職域の拡大を図るなど、更なる障害者雇用の促進に向けて検討を進めていく予定です。



広報・社会学連携室

大阪ルネサンス

前号でも述べたとおり、大阪大学の「社会学連携」活動は、大学のシーズを活かし、懐徳堂と適塾の学風を踏まえて、大阪の学芸と市民文化の再興のために、地域社会、近隣市民の人々等様々なセクターと手を携えて多様な文化事業を推進し、かきこい市民を育ててゆくことを目指しています。

教員・職員・学生、同窓会、後援会、そして育友会など「オール阪大」が、市民、企業、地方自治体と手を携え、すなわち「オール大阪」で、社会から囑望される人間（市民）を育むことで地域を活気づけ、大阪を元気にすることを目指しており、これを「大阪ルネサンス」と宣言して、様々な仕掛けの検討を進めてゆきます。

今年も7月25日、天神祭船渡御に出船する「阪大船」は、「大阪ルネサンス」のキャッチフレーズのもと、水都大阪に集う多くの人々に新生大阪大学の勇姿を披露します。

連携協定に基づく取り組み

大阪大学では、北摂近隣5市や大阪市、堺市と連携協定を締結し、様々な分野で協働しながら、地域社会の発展に寄与できる社会学連携活動の推進に努めています。

大阪市とは、昨年連携協定に基づく協議会を設置し、具体的な取り組みについて、①「世界の中の大阪・大阪の中の世界」、②「懐徳堂の精神を21世紀へ」及び③「健やかひとづくり・まちづくり」と3つのテーマを設け、それぞれ双方で事業の検討を進めています。7月には、大阪市が当番となり協議会が開催され、各事業の発展に向け意見が交わされる予定です。

在阪報道関係者との懇談会

例年7月に開催している「在阪報道関係者との懇談会」を今年度も開催する予定です。現執行部となって初めての懇談会ですので、報道関係者の方々と十分に意見交換ができるよう内容を検討しています。



昨年の懇談会の様子

阪大ニューズレター No.40 を刊行



阪大ニューズレター No.40 を刊行しました。「総長カフェ 21世紀懐徳堂ライブ」では、本派を自認する驚田総長が、世界最大級の書店を出店した「ジュンク堂書店」の工藤社長を訪ね、本を愛する専門家同士店内で、「本」との出会い、またその出会いによる豊かな時間の過ごし方などについて熱く話されました。

国際交流室

新しい短期留学生受入れプログラム FrontierLab@OsakaU

国際企画推進本部では、昨年秋から、本学理工系研究科の特徴である「研究室」において先端的なテーマについて研究を行い成果を挙げるとともに、研究実施上の各種スキルを獲得させることを主目的とした、新しい短期留学生受入れプログラム「FrontierLab@OsakaU」を企画してきました。幸い、日本学生支援機構（JASSO）の奨学金枠を26名分（学部12名、大学院14名）獲得することができ、本年3月から4月にかけて、第1回目の募集を行いました。募集期間がおおよそ40日間と大変短かったにもかかわらず、海外教育研究センターでのプロモーションも功を奏して、合計51名の応募がありました。理学研究科・萩原 哲教授（国際企画推進本部員：FrontierLab@OsakaU主コーディネータ）、基礎工学研究科・真島和志教授、工学研究科・掛下知行教授、石川真由美准教授（国際企画推進本部）と辻 毅一郎理事（国際企画推進本部長）の合計5名で審査を行い、42名の学生（学部生22名、大学院生20名）の受入れを決定しました。

このプログラムは当初、理学、基礎工学、工学各研究科の何人かの先生方の賛同を得て立ち上げたのですが、学生の配属を決定する段階では、さらに生命機能、情報科学、医学系各研究科の先生方にも学生の受入れについて協力を得ることができ、関連研究所、研究センターも含めた全学的なプログラムへと進展しました。今年の秋から実際に学生を受け入れることになります。初めての試みで、研究をどのように評価し、単位換算を行うかなど、様々な問題も抱えながらのスタートとなりますが、このプログラムの趣旨をご理解いただき学生の受入れを快諾していただいた多くの研究室に、心からの謝意を表します。

プログラムの詳細については、以下のURLをご参照下さい。

FrontierLab@OsakaU <http://www.osaka-u.ac.jp/jp/international/iab/e/FrontierLab.html>



キャンパスと保育園 —子どもたちとコラボレートする—

総務部企画推進課長 松本紀文

ことし4月、吹田キャンパスに新しい保育施設ができました。大阪大学が事業運営する「たけのこ保育園」と「まきば保育園」です。これまで自主運営で支えられてきた二つの保育園の伝統と歴史、そして何よりも保育士さんや保護者の方々の思いを引き継ぎ、大学が保護者の方、スタッフのみなさんと一緒になってつくる新しい保育園をめざしていきます。



保育園はキャンパスのヘソ？

「キャンパスの隅っこではなく、真ん中にあるということに意味があるんです」3月19日のたけのこ保育園の竣工記念式典での鷺田清一総長の挨拶です。大学は教育研究の場、したがって学部・研究科、研究所・センターは建設場所や立地条件の優先度も高い。しかしそこで働く教職員、勉学に通う学生さんたちの利便も大事と。こういう視点で計画され、建てられたのがたけのこ保育園です。新しいたけのこ保育園は国立大学法人が運営する保育施設としては定員規模で最大を誇り、保育における質的な面、施設設備面でもレベルの高い充実したものになっています。吹田キャンパスの中央部にあるたけのこ保育園とまきば保育園が大学の新しいシンボルとして構成員のみなさんから愛されるようになればと願っています。



たけのこ保育園



70メートルの廊下と省エネ対策

たけのこ保育園の設計施工にあたってはいろいろなアイデアと工夫が施されています。採光と外気を十分取り入れるための広い窓、高い天井。子どもたちへの安全対策を考えた構造、材質の使用。中でも直線70メートルの廊下は圧巻で子どもたちや保護者が気持ちよく通り抜けられる造りは秀逸です。全体的に明るく開放的な空間とアットホームな雰囲気を感じられるように配慮された設計になっています。また、屋根にはソーラーパネルを取り付け、晴れた日であれば保育園の照明はほぼ賄える省エネ対策も考えた施工になっています。



たけのこ保育園



保育施設建設の背景

大阪大学では、これまで男女共同参画を含む多様な人材活用の推進を重要課題の一つとして検討を重ねてきました。その施策の一環として教職員の育児支援のための環境を充実させることが決定され、これまで自主運営されていたたけのこ保育園とまきば保育所を大学が整備し、直接運営するシステムに変えました。運営理念に、「女性をはじめとする多様な人材を積極的に活用・開発することにより、研究・教育の質を高め、また大学および近隣地域において広く男女共同参画社会の形成に寄与することをめざす」ことを掲げています。教職員、学生を側面からサポートすることにより、モチベーションが上がり仕事や勉学

に専念できる環境が生まれます。そのことにより大阪大学の教育研究等の活動が活性化され、プラス効果を生み出すことが期待できます。



保育施設の運営と部局の協力

両保育園は、4月から大学が設置・運営する施設となったことで、大学組織の一つとして位置付けられることになりました。このため、保育施設運営委員会（委員長：西田正吾理事・副学長）を置いて種々の保育園に関わる案件を協議していくことになりました。保育業務そのものは大学が委託契約したサクセスプロスタッフ株式会社が実施に当たっています。また委員会の下には、たけのこ、まきばの両保育園専門部会を置いて大学と保護者の方、保育士さんたちと意見、情報を交換し合い、三者一体でよりよい保育環境を築いていきます。



まきば保育園



園児たちもキャンパスの構成員

園児の健康管理あたっては、医学部附属病院、歯学部附属病院、保健センターに協力していただき、突然の病気、ケガや健診に対応していくことにしています。その他、保育施設の運営に当たってはいろいろな場面で関係部局の協力をお願いすることになると思います。保育園も大学の組織、園児たちはキャンパスの構成員です。温かく見守っていただくようお願いしたいと思います。

まきば保育園のスタッフのみなさん



お天気がいいと自然いっぱいの中お散歩に出かけます。虫探しや探検に夢中。芝生をヨチヨチ歩き、走るのもとてもかわいい姿です。園内では、木のおもちゃやブロック、絵本、絵の具、ダンボールなど、楽しい事を選んでたっぷり遊びます。子ども達、保護者の声をしっかり拾いひだまりの様に…安心して穏やかに過ごす事の出来る環境づくりに努めていきたいと思ひます。5年後10年後の姿を楽しみにしつつ、保育士共に育ちあうことが出来ますように…。

園長 坂下 有香

たけのこ保育園のスタッフのみなさん



大学という大きなサポートを得て、今まで以上に充実した子育て支援の場となりました。教育・研究の質を高める大学にふさわしく、将来の人材を育成する保育園として、人と人との繋がりを大切にする子どもたちを育み、利用者にとって安心して預け、迎えに来てほっとできる空間づくりをと思っています。

園長 帯野 千登勢



保育園ホームページの開設と入園募集の案内

5月20日に保育園のホームページを開設しました。募集案内、最新トピックスなど保育園に関する話題を情報提供していきます。とくにこれから入園を希望される方はこのホームページを通じて入園募集を行いますので、定期的にご覧ください。今後は保育園での子どもたちの様子なども紹介し、スタッフのみなさんや保護者の方と共有できるホームページとなるように内容を充実していきたいと考えていますので、ご意見、ご感想をお寄せください。

保育園ホームページ <http://www.hoikuen.osaka-u.ac.jp/index.html>

保育園周辺の交通安全協力をお願い

保育園には、保護者の方のための送迎専用駐車場がありません。とくにたけのこ保育園の周辺は一時的な駐車スペースもなく、保育園南側の道路を仮の駐車ゾーンとしています。保護者の方にも交通ルールを守っていただくようお願いしていますが、朝夕の送迎時は子どもたちが乗り降りしますので、保育園周辺の通行に際しては、**減速、徐行、一旦停止など、安全運転を励行**していただくよう構成員の方々にご理解とご協力をお願いいたします。

「ナノ高度学際教育研究訓練プログラム」平成19年度修了認定証授与式および平成20年度開講式等開催

ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構は、標記の修了認定証授与式、開講式並びに特別講義を、修了生並びに新規履修生を合わせて175名（遠隔教室にて出席の74名を含む）の出席のもと、4月4日（金）に本学中之島センターを中心に開催しました。

本プログラムは、科学技術振興調整費新興分野人材養成プロジェクトとして、平成16年度より5年間の予定で実施中の、実社会で活躍中の研究者・技術者を対象とした5コースからなる研究科横断型の高度再教育プログラム（1年間）です。また、サテライト教室は近畿、関東、東北から中部地区（2カ所）にも拡大し、多くの企業のご協力を得ております。

修了証書授与式（4期生86名）では、西尾章治郎機構長（理事・副学長）より、修了認定証および大阪大学エクステンション修了証書が授与され、開講式（5期生130名）では、西尾機構長の開会の挨拶、赤井久純再教育プログラ



修了証書授与式（中之島センター）



5期生開講式（阪大東京オフィス）

ム主任（理学研究科教授）の履修指導がありました。また特別講義「ナノテクの現状と今後の展望」（産業科学研究所・川合知二教授）では、受講生が質問を交えて熱心に聞き入っていました。引き続いての懇談会には、121名が参加し、受講生、講師陣、大学関係者相互の親交を深める絶好の機会となりました。なお、サテライト教室の1つである大阪大学東京オフィス（キャンパスイノベーションセンター 6F）では33名の受講生が出席しました。

今年度の大学院生向けのプログラムもスタートし、必修科目のナノテクキャリアアップ特論の前期開講や社会人再教育講義への大学院博士後期課程社会人特別選抜生の履修許可など、今年度から大阪大学が開始する大学院高度副プログラムと科目等履修生高度プログラムとして、内容の一層の充実が図られます。

（研究推進部研究推進課）

平成20年度大学院工学研究科博士課程入学式挙行

平成20年度大学院工学研究科博士前期課程・後期課程入学式が、4月4日（金）コンベンションセンター MO ホールにおいて挙行されました。



当日は、大学院工学研究科新入生の博士前期課程814名、博士後期課程102名中、約500名の新入生並びに保護者が出席し、会場は超満員となりました。

式は、馬場章夫工学研究科長、谷口研二教育研究評議員を始め、4名の副研究科長、10名の各専攻長の列席のもと、掛下知行教務委員長（副研究科長）の司会により進められ、列席者の紹介、馬場研究科長の式辞の後、入学生を代表して博士後期課程知能・機能創成工学専攻の松村礼央さんが宣誓を行いました。

続いて来賓として列席いただいた豊田政男名誉教授（前工学研究科長）による「これから大学院で学ぶ皆様へー研究力と人間力が人の美しい魅力を生むー」と題した入学記念講演が行われ、閉式となりました。

（工学研究科・工学部）

安全衛生管理部とソウル国立大学環境安全院が学術交流に関する覚書締結

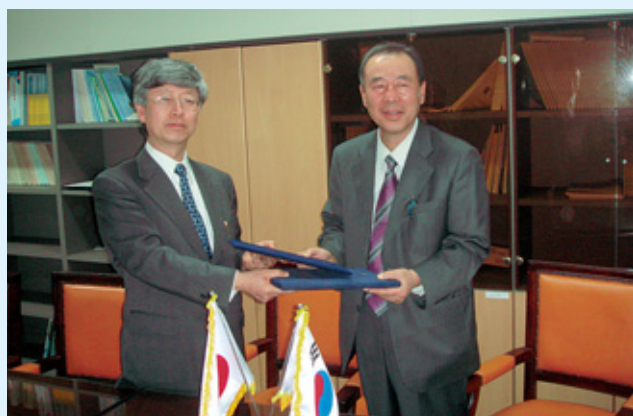
安全衛生管理部とソウル国立大学環境安全院は、大学間学術交流協定に基づき、両大学における安全衛生管理体制の向上に向けて緊密な関係を築くことに合意し、4月11日（金）に学術交流に関する覚書を締結しました。

調印式は、ソウル国立大学環境安全院において執り行われ、本学からは安全衛生管理部長の西田正吾理事・副学長、同副部長の山本 仁教授が、ソウル国立大学からは環境安全院長の李正學教授をはじめ多数の関係者が出席しました。

また調印式に先立ち、特別講義が行われ、西田理事・副学長からは本学の概要と広域災害における危機管理システム構築手法についての研究内容について、山本教授からは本学における安全衛生管理システムについてそれぞれ紹介がありました。参加者からは日本の国立大学法人制度や本



特別講義を行う山本教授



調印式の様子 西田理事・副学長（左）と李正學院長（右）

学における定期巡視システム等について積極的な質問があり、活発な意見交換が行われました。調印式終了後には、李正學院長からソウル大学における安全衛生管理の取り組み状況について説明があり、今後の両大学間における連携協力体制等について協議しました。

この覚書により、両大学では、安全で快適な教育・研究環境の実現を目的として、共同研究・シンポジウムの実施、研究者の交流、両大学での事故事例と附帯情報の共有等を進めていくこととなります。

7月2日（水）には、李正學院長をお招きして記念講演会を実施する予定となっています。

（安全衛生管理部）

医学系研究科で国際セミナー実施

医学系研究科では、「医科学修士の健康医療問題解決能力の涵養」大学院教育改革プログラムの一環として、4月14日（月）コンベンションセンターにて国際セミナー「Integrated Research and Education on Medicine and Social Science」（文理融合研究と教育の実践）を実施しました。

社会疫学研究の第一人者である、ハーバード大学公衆衛生大学院のIchiro Kawachi教授（Director of Harvard Center for Society）をお迎えし、文理融合研究と教育の実践について自身の研究についてのお話も交えてご講演頂きました。人は社会の中で生きており、様々な健康医療問題も家族、友人、同僚等の社会的な絆により影響を受けていること、また、その影響が男女によって異なることを指摘され、健康医療問題の解決には医学のみではなく、文理融合的なアプローチの必要性を強調されました。

医学系研究科はもとより、人間科学研究科や他大学から



の参加者を含め約80名の参加があり、多くの質問や意見が出て、大変活発な議論が行われました。

（医学系研究科・医学部）

平成20年度大阪大学初任者研修実施

今年度最初の研修である平成20年度初任者研修が、4月21日(月)から23日(水)までの3日間にわたりコンベンションセンター及び待兼山修学館において行われました。

この研修は、昨年5月1日以降採用された事務系、図書系及び技術系職員32名(本年度は他機関への出向者2名を含む)を対象として、「職員としての自覚と意識の確立を図り、初任職員として必要な基礎的知識・技能を身につけ、職場への適応力を養う」ことを目的として実施されたものです。

開講式では、鷺田清一総長から2008年年度所感の内容を交えながら、各自のスキルアップに努めていただきたい旨、激励の言葉がありました。その後(株)アイ・イーシーの研修講師から「社会人の心構えを身につけること」、「主体性を養うこと」、「チームワークを意識すること」、「コミュニケーション力強化」について2日間にわたり講義・演習が行われました。

3日目午前中は、岩切平治総務部長から「大阪大学職員に求められること」についての講話と、本学セクシュアル・ハラスメント専門相談員の小田切由里さんから「大学におけるセクシュアル・ハラスメント防止のために」についての講義が行われました。午後は豊中キャンパスの待兼山修学館に会場を移動して、江口太郎総合学術博物館長から大



総長挨拶

阪大学の歴史を理解し、親しみと愛情をもって仕事に取り組んでもらうことを目的として同館の説明が、高杉英一理事・副学長から「大阪大学の歴史」の講義が行われました。

開講式では、月岡英人理事・事務局長から修了証書授与の後、この研修で学んだことを実際の業務を行う際に活用いただくとともに、大阪大学のために活躍いただきたい旨、激励の言葉がありました。

この研修を通じて受講者は、お互いに親睦を深め合うなど有意義な時間を共有するとともに、3日間の研修を全員、無事修了しました。(総務部人事課)

基礎工学部・基礎工学研究科初任教員研修会実施

基礎工学研究科では、5月1日(木)に「平成20年度基礎工学部・基礎工学研究科初任教員研修会(初任者FD)」を同研究科会議室において実施しました。

この研修会は、新たに赴任され基礎工学部・基礎工学研究科の教育研究を担当することになった教員を主な対象に、大阪大学、基礎工学部、基礎工学研究科の現状についての



畑田名誉教授の講演

認識を深めるとともに、大学教育を担当する教員として、教育に関する力を高めることを目的として平成15年度から実施しているものであり、今年度の研修会には、基礎工学研究科、情報科学研究科並びにナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構から24名の教員(教授4名、准教授6名、講師1名、助教13名)が参加しました。

当日は、西田正吾理事・副学長による「大阪大学の教育・研究の目標と運営の方針」の講演に始まり、畑田耕一名誉教授(元副学長)による「大阪大学の歴史」の後、戸部義人研究科長による「基礎工学部の概要」、佐藤宏介教授による「基礎工学部の教育」、井元信之教授による「基礎工学部の入試」、谷口康昭事務長による「大阪大学と基礎工学研究科の事務処理」、飯國洋二教授による「セクハラ・アカハラ防止の重要性」と続き、最後に保健センター学生相談室長の井上洋一教授による「学生のメンタル・ヘルスケア」についての講演が行われました。

参加した24名の教員は、受講生という立場でメモを取りながら熱心に聞き入っていました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

いちよう祭開催

5月2日(金)及び5月3日(土・祝)の両日に、本学の創立記念日を祝し、全学を挙げて新入生を歓迎するとともに教職員、学生の親睦及び地域との連携を図ることを目的とした「いちよう祭」が開催されました。

今年度から箕面キャンパスが加わり、3つのキャンパスで学内施設開放、展示会、講演会、園遊会等が行われました。

新入生のほか、大阪府下の各高等学校など学外の方々へ広く参加を呼びかけ、各部局の施設開放・展示会・講演会等に多数の参加者が訪れました。



施設開放の様子（理学研究科）



（総務部総務課）

大阪大学室内楽アンサンブル第6回演奏会開催

OUCE（大阪大学室内楽アンサンブル Osaka University Chamber Ensemble）の第6回演奏会が5月3日(土・祝)に、コンベンションセンター MO ホールにて開催されました。

いちよう祭、吹田祭関連行事として、年2回、春と秋に演奏会を開いておりますが、大学関係者、近隣にお住まいの方などを中心に220名の方に来ていただくことができました。アンケートからも、回を重ねる毎に、ご好評の声が強まっていることに、メンバー一同喜び、励みとさせていただきます。

特に、今回は、アンケートの声で一番多くいただいております「有名な曲、なじみのある曲を演奏してください」という要望にお答えして、初めてクラシック曲ではないスタジオジブリの曲も演奏し、好評を博しました。

毎回、趣向をこらしたプログラムを考えておりますので、どうぞ今後もご支援いただき、演奏会へ足をお運びくださいますよう宜しくお願い致します。

第7回演奏会は11月2日(日)を予定しております。大阪大学で、日常的に音楽を楽しむ時間を持ち、文化の種を育



てることが、OUCEの目標でありますので、是非皆様お誘い合わせの上、お越しください。

OUCEの活動は、ホームページ (<http://orchestra.musicinfo.co.jp/~ouce/>)*をご覧ください。

♪ただいまメンバー募集中 ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ等の弦楽器奏者の方、お待ちしております♪

(OUCE)

体育会 6 賞及び課外活動総長賞の表彰式開催

5月2日(金)のいちょう祭において、体育会6賞及び課外活動総長賞の表彰式が豊中キャンパスのメインステージで行われました。爽やかな晴天の下、受賞団体部員の他一般学生も多数集まって厳かな雰囲気の中、表彰式は行われました。

今回の体育会6賞は以下の団体及び選手が受賞しました。

◆「赤堀賞」フィギュアスケート部

「赤堀賞」は年間最優秀クラブに贈られる賞です。フィギュアスケート部は、関西インカレ団体男子総合優勝・団体女子総合3位、第27回国立大学フリースケーティング大会総合男子準優勝・総合女子優勝、第1回西日本インカレAクラス男子総合優勝・Cクラス女子総合優勝という輝かしい成績を収めた他、前年度会長賞を受賞した梅谷英生選手が個人で全国屈指の成績を収めました。

◆「会長賞」アーチェリー部 松浦由加子さん

「会長賞」は年間最優秀選手に贈られる賞です。アーチェリー部の松浦由加子さんは、第49回全日本ターゲットアーチェリー選手権大会で北京オリンピック代表選手2名などを破って準優勝に輝いた他、全日本学生選手権9位、国民体育大会アーチェリー競技(富山県代表)6位などすばらしい成績を収めました。

◆「釜洞賞」ワンダーフォーゲル部

「釜洞賞」は年間で最も特色のある活動を行ったクラブに贈られる賞です。ワンダーフォーゲル部は、創部50周年記念としてインドヒマラヤの無名峰に登頂して、その山の名前を申請・命名す



ることを企画しました。そして、7名全員で5615mの高峰に登頂することに成功し、「ワンダーフォーゲル」をヒンディー語にした「プラバシ・パクシー」を山の名前としてインド登山協会に申請しています。

◆「熊谷賞」テコンドー部 伊津野 恵さん

「熊谷賞」は年間最優秀女子クラブもしくは選手に贈られる賞です。テコンドー部の伊津野 恵さんは、2007年全日本学生テコンドー選手権大会女子バンダム級優勝、全日本テコンドー選手権大会女子バンダム級3位というすばらしい成績を収め、その結果全日本強化指定選手に選ばれています。

◆「山村賞」ソフトボール部

「山村賞」は七大戦において顕著に活躍したクラブ、とりわけ前年度より著しく順位が上昇したクラブに贈られる賞です。七大戦のソフトボール競技は19年度から正式種目に加わり、ソフトボール部はその第1回大会において優勝を果たしました。

◆「宮原賞」自動車部、水泳部男子、スキー部、ソフトテニス部、ソフトボール部、女子卓球部、ラクロス部

「宮原賞」は七大戦において優勝を収めた全てのクラブに贈られる賞です。今年度は上記7団体が受賞しました。

また、平成12年度に制定され、今年度で9回目を迎えた「課外活動総長賞」は、学生の課外活動の充実と更なる活発化を図ることを目的として、前年度において特に優れた活動を行った学生団体等を表彰するものです。体育系、文化系の大学公認及び学部公認団体から非公認のサークル団体等まで、学内の全ての課外活動団体等から公募を募り、平成20年度においては28件の応募があり、これら応募のあった団体等の様々な活動結果について学生生活委員会において選考した結果、以下の8団体等が選出され、第9回「課外活動総長賞」を受賞しました。

- ・優秀賞：松浦由加子さん(アーチェリー部)、テコンドー部、舞踏研究会、競技かるた会
- ・特別賞：ワンダーフォーゲル部、アマチュア無線クラブ、高智子さん、飛行機制作研究会アルバトロス
(学生部学生支援課)

人権問題に関する映画会開催

人権問題に関する映画会が、憲法週間中の5月2日(金)に基礎工学部シグマホールで開催されました。

この映画会は、人権問題啓発行事の一環として毎年行っているもので、今年度は人権問題全般について認識を深めてもらうため、次の2作品を上映しました。

- ①「夢の約束」(同和問題)
- ②「蜚の舞う街で」(人権問題全般)

午前・午後2回の上映で、教職員・学生等約80名の参加者があり、最後まで熱心に映画を鑑賞しました。

人権問題に対する正しい理解と認識を深めるため、引き続き各種行事を予定していますので、みなさまの積極的な参加をお願いします。

(総務部総務課)

第3回ホームカミングデイ開催

(トピックスからの続き)

当日はイ講堂にて、武田佐知子理事・副学長の司会により、鷺田清一総長の主催者挨拶、熊谷信昭同窓会連合会会長（元総長）の挨拶の後、辻 毅一郎理事から「海外拠点活動について」と題して、大阪大学の活動報告が行われました。

場所を「宙」に移してのレセプションは、森 勇介工学研究科教授の司会により、岸本忠三元総長による乾杯のご発声でスタートしました。会場では、家族連れの方々も多く見られ、総長と記念撮影をするなど終始なごやかな雰囲気の中、協賛いただいた企業等から提供のあった景品の抽選会も催され、来年の再会を互いに誓い合いながら散会となりました。



辻理事による活動報告



岸本元総長による乾杯



レセプション



抽選会

(総務部評価・広報課広報・社会学連携事務室)

第5回大阪大学睡眠学談話会開催

5月7日(水)に第5回大阪大学睡眠学談話会が開催されました。この談話会は、一昨年度医学部附属病院に設置された睡眠医療センターを核に、基礎医学・社会医学も含む学際的な睡眠学研究拠点形成構想で発足し、第1回の大阪バイオサイエンス研究所理事長早石 修先生のご講演に始まり、毎回睡眠医学に携わる幅広い領域の先生方にご講演頂いてきました。今回は、歯科領域の視点からみた睡眠学を本学歯学部高次脳口腔機能学准教授の館村 卓先生に、公衆衛生学の視点からみた睡眠学を日本大学医学部公衆衛生学教授の大井田 隆先生にご講演頂きました。

館村先生には、「睡眠と歯科領域との関連について」という演題で、睡眠時無呼吸症治療のオプションとして寄与するようになってきた口腔装置について、原理、適応例、outcome について紹介して頂き、さらに近年増加傾向にある遷延性意識障害例での経口栄養摂取障害への取り組みに睡眠・呼吸機能の改善が必要であることをお話頂きました。大井田先生には、「睡眠と公衆衛生学について」という演題で、睡眠時間と生活習慣、心理的健康、および身体的疾患との関連についての最新の疫学研究をご紹介頂き、睡眠問題に対する公衆衛生学的対策の重要性をお話頂きました。



講演後は約100名の聴衆とともに、活発な討議が行われました。また、講演終了後、懇談の機会を持ち、先生方と睡眠学の話に盛り上がり、参加者一同有意義な時間を過ごしました。

(医学系研究科・医学部)

第8回メンタルヘルス講演会開催

第8回メンタルヘルス講演会が、5月8日(木)に医学系研究科保健学専攻第1講義室で開催されました。保健センター主催によるメンタルヘルス講演会は、全学の教職員を



対象にして、学生のメンタルヘルス支援を目的に毎年行われています。今回は新しい試みとして、保健学専攻のFDと共催する形で開催されました。

講師には神戸大学大学院人間発達環境学研究科(発達科学部)の吉田圭吾准教授をお招きし、「学生相談に見られる最近の学生の悩み」についてご講演いただきました。学生相談の豊富なご体験から、様々な事例を取り上げて具体的に紹介され、参加者全員が大変興味深く傾聴し、あっという間に1時間が過ぎました。

学生のメンタルヘルス支援へのニーズが高まっていることを、教職員も実感されておられるようで、参加者アンケートによれば、今後聞いてみたいテーマとして「アカデミックハラスメント」や「発達障害」が挙げられていました。今後も各学部のFDと共催し、より多くの教職員に参加していただけるような運営を目指していく予定です。

(保健センター)

平成20年4月～5月の表敬訪問

ハビエル・ボンセ駐日エクアドル共和国大使が小泉理事・副学長らと懇談

4月21日(月)、ハビエル・ボンセ駐日エクアドル共和国大使が、イリナ・ボルバ三等書記官と共に、小泉潤二理事・副学長、辻 毅一郎理事・国際交流室長を表敬訪問しました。表敬訪問には、山蔭昭子日本語日本文化教育センター教授と千葉 泉人間科学研究科教授が同席しました。

ボンセ大使は、日本での入手が難しいとされるラテン・アメリカの書籍を本学に寄贈し、ラテン・アメリカへのさらなる理解に役立てて欲しいと述べられました。寄贈された書籍は、小説、伝記、詩集などの幅広いジャンルに渡る全47冊で、附属図書館筑面分館に、所蔵されることになりました。

最後の楽園と称されるガラパゴス諸島(1994年世界遺産の自然遺産として登録第一号)は、エクアドルにある国



ボンセ大使(左)と小泉理事・副学長(右)

立公園ですが、そこに住む島民のインフラに関する研究の必要性についても、意見交換がなされました。

タイ・国立科学技術研究所(TISTR)訪日団が鷺田総長と昼食懇談

5月16日(金)、銀杏会館会議室において、鷺田清一総長とタイ・国立科学技術研究所(TISTR)の訪日団10名との昼食懇談会が行われました。鷺田総長との懇談に先立ち、



鷺田総長、西尾理事・副学長を囲む TISTR 訪日団

まず一行は、今回の来訪目的である「日本の科学技術の現状視察」のため、相本三郎蛋白質研究所長、原島 俊生物工学国際交流センター長、栗本英世グローバルコラボレーションセンター長、宮本和久特任教授の案内のもと、本学各施設を訪れ、懇談を行いました。

その後行われた昼食懇談会には、鷺田清一総長をはじめ、研究・産学連携担当理事である西尾章治郎理事・副学長、辻 毅一郎理事・国際交流室長、永井克也名誉教授、世界言語研究センターの宮本マラシー教授と村上忠良准教授が参加し、学生や研究者交流のみならず、新たな交流のあり方についても意見交換が行われました。最近になって、本学発ベンチャー企業である ANBAS 株式会社と TISTR との間で、研究交流の覚書も締結されたこともあり、なお一層の学術及び教育交流が推進されることが期待されます。

ステファン・ノーレン駐日スウェーデン王国大使が鷺田総長と懇談

5月23日(金)、銀杏会館で行われた世界言語研究センター主催の「スウェーデン留学フェア」に出席するために、ステファン・ノーレン駐日スウェーデン王国大使とその関係者が、鷺田清一総長及び武田佐知子理事・副学長を表敬訪問しました。

懇談では、本学外国語学部が国立大学で唯一スウェーデン語並びに、その言語・社会・歴史などの教育を行っている事に対し、ノーレン大使が謝辞を述べられ、さらに、異文化を理解するために、言語教育は重要であると話されました。

また、江戸時代に出島のオランダ商館医師として派遣されたスウェーデンの植物学者カルル・ベータ・ツェンペリーの話から、本学の学問及び精神の源流である適塾や緒方洪庵についても話がおよびました。この表敬訪問には、世



適塾、緒方洪庵の説明をする鷺田総長

界言語研究センターの清水育男教授と高橋美恵子准教授も同席しました。

(国際部国際交流課)

シンガポール科学技術研究庁長官一行来訪

5月14日(水)、シンガポール科学技術研究庁のリム・チュアン・ポー長官他一行5名がWPI免疫学フロンティア研究センターを訪れ、審良静男拠点長および古城紀雄事務部門長との間で懇談を行いました。ポー長官は、文部科学省の「世界トップレベル国際研究拠点（WPI）形成促進プログラム」委員会委員でもあり、平成19年10月にWPI拠点として発足した本センターの現状と今後の展望について、活発な意見交換が行われました。

懇談終了後、一行は鷺田清一総長を表敬訪問し、西尾章治郎理事・副学長同席のもと、シンガポールの研究開発・ハイテク産業の拠点であり、黒川紀章氏デザインによるフュージョン・ポリスの紹介等を通じて、日本とシンガポール、とりわけ本学とシンガポール各機関との研究交流の推進等について懇談を行いました。

(免疫学フロンティア研究センター)



鷺田総長とポー長官（中央）

スウェーデン留学フェア2008開催

昨秋、東京のスウェーデン大使館で行なわれた留学フェアを次回は大阪でというステファーン・ノレーン駐日スウェーデン大使のご発案により、今回スウェーデン大使館と本学世界言語研究センターを主催に、またスウェーデン政府広報機関 Swedish Institute と外国語学部を後援として、5月23日(金)吹田キャンパスの医学部銀杏会館にて「スウェーデン留学フェア2008」を開催しました。

フェアは鷺田清一総長、ノレーン大使、高橋 明世界言語研究センター長のご挨拶に始まり、Swedish Institute のモニカ・ヴィルツカラ国際課課長補佐、東海大学国際文化学部の川崎一彦教授、速水 望報道補佐官、世界言語研究センターの清水育男教授諸氏からスウェーデン留学に関する有益な教示や具体的な情報に富む講演が行われました。最後に、高橋美恵子准教授を司会に、古谷大輔准教授、ヨハンナ・カールソン外国人招聘教員、スウェーデン語専攻の学生3人（肥田順子さん、高橋良寛さん、梅谷 綾さん）を交えてスウェーデン留学体験談をフリートークで披露しました。参加者は一般の方も含めおよそ130名、会場はスウェーデン留学への熱意と関心にあふれ、アンケートからもそれが裏付けられ主催者側としては成功裡であったと確信しました。



留学フェアで挨拶をされるノレーン大使

なお、「留学フェア」に先立ち、ノレーン大使、ヴィルツカラ課長補佐とスウェーデン語専攻の多数の学生たちとの間でスウェーデン語による対談がもたれました。学生たちは日ごろ研鑽してきたスウェーデン語を終始駆使し、何ら支障もなく双方の質疑応答が活発に行なわれ、対談終了後、大使ならびに課長補佐、ヨアキム・ベルイストロム報道参事官から本学学生たちへ熱い賞賛のお言葉をいただきました。

(世界言語研究センター)

大阪大学21世紀懐徳堂オープニングセレモニー開催

(トピックスからの続き)

佐治敬三メモリアルホールで行われたセレモニーでは、武田佐知子大阪大学21世紀懐徳堂学主（理事・副学長）の開会挨拶の後、「大阪元気力・文化力」と題したトークセッション（講師：河田聡大学院工学研究科教授、平田オリザCSCD教授、高島幸次CSCD招へい教授）の他、「大阪のメセナ活動～懐徳堂～」(講師：湯淺邦弘大学院文学研究科教授)及び「21世紀懐徳堂と社会学連携」(講師：金水敏CSCDセンター長)の二つのプレゼンテーションが行われました。



プレゼンテーション「21世紀懐徳堂と社会学連携」
(金水センター長)



堀井理事長の祝辞



金森元総長による乾杯



鷺田総長の挨拶



青柳氏によるピアノ演奏

また、セレモニー終了後、交流サロンに会場を移しレセプションが行われました。ピアニスト青柳いづみこ氏によるピアノ演奏で始まり、鷺田清一総長の挨拶の後、堀井良殷（財）大阪21世紀協会理事長から来賓祝辞が述べられ、金森順次郎元総長の発声による乾杯の後歓談に入りました。当日は、平松邦夫大阪市長の他、関西財界、近隣自治体、文化NPOの関係者、本学関係者など約150名もの多くの方が出席のもと、お互いに意見交換を行うなど活発な交流の場となりました。また、途中、青柳いづみこ氏によるピアノ演奏でレセプションが一層盛り上がり、終始和やかな雰囲気の中で発足を祝いました。

(大阪大学21世紀懐徳堂)

院生のためのキャンパスハラスメント問題研修会開催

言語文化研究科では、5月29日(木)に研究科棟大会議室で「院生のためのキャンパスハラスメント問題研修会」を開催しました。言語文化研究科では、従来キャンパスハラスメントに関する研修は教職員・院生全体に対して行ってきましたが、本年度から、春には院生向けに、秋には教職員向けにキャンパスハラスメント研修会を行うことにしました。

今回の院生向け研修会の講師には、セクシュアルハラスメント相談室の吹田地区で専門相談員をされている青木あさ代先生をお招きし、1時間ほどの研修の後、参加者との意見交換を行いました。参加した院生からは、大阪大学に

おけるセクシュアルハラスメントやアカデミックハラスメントへの取り組み姿勢や現状が知れて、「非常に有意義な研修会でした」という意見がだされました。

(言語文化研究科)



AEARU学生テニス大会で阪大チームが準優勝!

東アジアの主要な17大学(日本では本学及び東京大学等6大学)が加盟するAEARU(東アジア研究型大学協会)主催による学生テニス大会が、5月27日(火)から30日(金)までの間、台湾大学で開催されました。



この大会に、本学体育会庭球部部長の床谷文雄国際公共政策研究科長率いる硬式庭球部男子部員4名、コーチ1名による大阪大学チームが日本の大学としては唯一参加し、大会に参加したAEARU加盟大学7校(台湾大学、清華大学(台湾)、北京大学、南京大学、清華大学(中国)、ソウル大学、大阪大学)中、準優勝という好成績を修めました。

学生テニス大会の開催というのは、AEARU関連活動としては初の試みでしたが、参加者にとっては、東アジアの著名大学チームとの試合という貴重な体験を通し、国により、人により、テニスのプレイも考え方も違うということを体感し、英語によるコミュニケーション能力の必要性を実感し、そして何より東アジアの人脈という財産を得ることのできた、極めて有意義なイベントでした。

今後も、このような活動への学生の参加を奨励していきたいと思います。

(国際部国際交流課)

適塾特別展示開催

平成20年度の適塾特別展示「適塾から大阪医学校へ」が適塾記念会と共催で、6月3日(火)から15日(日)まで適塾において開催されました。

今回の特別展では、緒方洪庵の訳書や適塾に学んだ人たちの言葉に示された「適々」のこころ、教えたどり、その伝統の上に、地域に生き世界に伸びることを目指して築かれてきた、適塾から大阪医学校、大阪大学医学部への歩みが概括して展示されました。

13日間の期間中、多数の参観者が訪れ、好評のうちに閉幕しました。

(総務部評価・広報課広報・社学連携事務室)



メリメとバルザック — 19世紀フランス小説の二面 —

大学院文学研究科教授 柏木隆雄

メリメとバルザックはほぼ同時期に作家として活動を始めた。バルザックは大衆小説の創作から始めて、のち出版業、印刷業、活字鑄造業に手を染めたものの失敗、再び文学の世界に戻り、以後20年間、ペン一本で立つ作家として『人間喜劇』としてまとめられる小説群を大量に書き進めた。メリメは短編小説で名声を博しながら、公的には海軍省や歴史記念物監督官など役人として終始し、バルザックの死後はナポレオン三世妃の知己として、また廷臣として第二帝政崩壊まで生きた。二人の公的な生活はこうのように異なるが、その資質はすでに処女作の出版の形式にも表れている。メリメは本名を名乗らず、あくまでアマチュアとして終始しようとし、バルザックは著者名に文士としての戦略的な工夫を施した。

こうした二人の作風の違いを短編小説『マテオ・ファルコネ』（メリメ）と『海辺の悲劇』（バルザック）を例として取り上げ、詳しくテキスト分析することによって明らかにすることが出来る。両者とも父を裏切った跡継ぎたる一人息子を、父自身が死の裁きをつけることで、決着をつけるが、メリメは淡々たる叙事に終始し、作家の感情を交えない。バルザックはその決着のあとの父の苦悩と、それを語る青年の内的な苦悩をこもごもに描く。この二人の文章のもつ力に対する考え方、とらえ方の相違は、案外彼ら二人のみならず、19世紀フランス小説の重要な二面を解き明かす鍵を示すものかも知れない。



かしわぎ・たかお

プロフィール

略歴：昭和44年大阪大学文学部（仏文学専攻）卒業。昭和46年同大学院修士課程修了、昭和50年博士課程単位修得退学。昭和50年神戸女学院大学文学部専任講師、昭和53年同助教授。昭和57年文学博士号取得（パリ第七大学）。昭和58年大阪大学文学部助教授（仏文学講座）、平成3年同教授。平成11年フランス共和国文部省よりパルム・アカデミク勲章（シュヴァリエ）受賞。平成11年～13年評議員、平成16～18年文学研究科長・文学部長。日本フランス語フランス文学会副会長、同関西支部長などを歴任。バルザックを中心とするフランス19世紀小説の研究、および日仏の比較文学的研究。主要著書として La Trilogie des Célibataires d'Honoré Balzac (Nizet, 1983)、『謎とき「人間喜劇」』（ちくま学芸文庫、2000）、Balzac, romancier du regard (Nizet, 2002) などがある。

ゲーテ『ファウスト』と象徴

大学院文学研究科教授 林 正 則

中学国語の教科書で鵑外訳「ミニョンの歌」の切ない官能の憧れに触れてから、五十年。ひとすじにゲーテの世界と深く関わってきた。そのころ読んだ『若きヴェルターの悩み』では、人間性の底知れぬ深淵に目くるめく思いがしたものだ。卒業論文では『ファウスト第1部』の「グレートヒェン悲劇」を扱ったが、次第にゲーテの生き生きとした言語表現の秘密に迫りたいとの思いが強くなった。ゲーテは、韻文であれ散文であれ自然科学論文であれ、つねに詩人たるの自覚を失わなかった。科学も詩も根底においては一つである、一つでなければならぬ。その確信を、彼は「象徴」ということばに託したのである。

二年間に及ぶイタリア滞在中、ゲーテは南国の豊穡な植相と紺碧の空、そして古典古代の造形美術に触れて、彼の「古典主義」的な世界把握の根底を得た。この世界を豊かに彩る無数の多様な植物のうちに、ゲーテは植物の原形式とも言うべきもの、「原植物（象徴的植物）」を見て取った。個々の植物は、一方では、置かれた環境や条件に応じて無限に変容（メタモルフォーゼ）する。と同時に他方では、種や属といった自己固有の形式（アイデンティティとしての「原植物」）にあくまでも固執しようとする。この二つの傾向が求心力と遠心力として力強く拮抗し均衡するとき、生命はもっとも美しく輝くのである。『色彩論』でも、ゲーテは光と闇の根源的な対立を通して色彩現象が鮮やかに発現するのを見出した。ゲーテ「古典主義」の核心をなすものは、「両極的な力の拮抗と均衡のうちに絶えず高まって行く調和的な全体」という理念である。

しかし、『ファウスト第2部』冒頭の主人公の独白「色とりどりの反映、それが私たちの生なのだ」は、美しく静かな調和的世界に安住の場を見出し得ない人間の悲劇を暗示している。そして、ファウストの荒々しい行跡が語っているのは、人間の調和的な全体とは、一人一人の人間が絶えざる自己革新の危機を通り抜けながら瞬間瞬間ごとに戦い続けなければならないという、ダイナミックな生命の運動そのものであるということであった。

卒業論文から40年で再び『ファウスト』に立ち戻ったが、これを研究生生活の再スタートラインにしたいと考えている。



はやし・まさのり

プロフィール

略歴：昭和45年4月大阪大学大学院文学研究科修士課程ドイツ文学専攻修了。昭和45年5月～昭和50年3月大阪大学文学部助手。昭和50年7月～昭和51年9月DAAD奨学生としてボン大学に留学。昭和51年10月大阪大学言語文化学部講師。昭和56年2月同助教授。平成元年4月文学部ドイツ文学専攻助教授。平成8年1月同教授。日本ドイツ文学会理事、阪神ドイツ文学会会長、日本ゲーテ協会理事、ドイツ文学語学振興会評議員などを歴任。学内では評議員、附属図書館図書館豊中地区運営委員長などを務める。

サルとヒトの比較発達

大学院人間科学研究科教授 南 徹 弘

学部時代のネズミの条件づけが心理学研究の出発点となり、大学院からはニホンザル、カニクイザル等のマカク類と人間の乳幼児の行動と発達を縦断的に観察し、種間の行動の共通点と相違点を明らかにすることを目的として研究を進めてきた。比較発達心理学・比較行動学の視点から、人間を含む霊長類の初期行動発達に関する基本的特徴を明らかにする糸口がわかった。

霊長類研究においては、母子関係の発達、性差の発達、ニホンザルの母子隔離飼育と常同行動の関連性等をはじめとする分析を行った。その中で、隔離の時期・期間の常同行動の発現に及ぼす影響や発達における母子・仲間との身体接触の重要性を具体的に明らかにすることができた。再び、人間科学部に着任以降は、附属比較行動実験施設の充実と併行して、新生児や保育園、低出生体重児も研究の対象とし、他の霊長類より緩慢な発達を示すヒトの特徴に注目し、初期行動発達研究を進めることができた。とりわけ二足歩行の開始と食行動の自立との関連性の研究や地域差・文化差の研究は、人間科学としての発達心理学に新しい視点をもたらすことができるものと期待している。



みなみ・てつひろ

プロフィール

略歴：昭和43年鹿児島大学文学部文学科心理学専攻卒業。昭和46年大阪大学大学院文学研究科修士課程心理学専攻を修了、昭和48年同博士課程を単位取得退学、大阪大学人間科学部助手。昭和53年東京女子大学短期大学部専任講師、昭和54年同助教授を経て、昭和60年大阪大学人間科学部助教授。平成8年同教授、平成12年大阪大学大学院人間科学研究科教授（行動生態学講座／比較発達心理学分野）。平成6年博士（人間科学）。昭和61年より大阪大学人間科学部（平成13年より大学院人間科学研究科）附属比較行動実験施設長を平成16年まで併任。平成13年大阪大学評議員。学外では、日本発達心理学会常任理事、日本動物心理学会理事、大学基準協会判定委員、日本学術振興会科学研究費委員会専門委員等を歴任。

「間（ま）」の感性情報心理学

大学院人間科学研究科教授 中 村 敏 枝

音にかかわる人間行動について心理学的研究を行ってきたが、その中で最も感動しつつ楽しんだ研究として、「間」の感性情報に関する研究を取り上げた。日本文化は「間」の文化といわれるだけあって、われわれの行動には「間」が多くかかわっている。「間」という概念はきわめて曖昧模糊として、その実態が掴めないと言われ、「間」は科学的には取り扱えないものとされてきた。しかし、少なすぎる空白や多すぎる空白は誰にとっても快いものではない。適切なサイズの「間」をわれわれの感性は求めている。多くのヒトに共通する丁度良いと感じられる「間」があるならば、そこに何らかの法則性を見出し、「間」の感性を定量的に追究することが可能であると考えた。空間的・時間的な「間」は物理的には「無」あるいは定常的な状態である。少ない空間や時間の中に可能な限り多量の情報を詰め込もうという経済性・効率性優先の観点からすれば、「間」は無駄なものと軽視されるかもしれない。しかし、心理的には「間」は「有」以上の効果を持つ。このことを実証するために蓄積した実験結果を紹介しつつ、「間」の感性の法則性、「間」と呼吸の関係、「間」のゆらぎ、円滑なコミュニケーションにおける「間」の役割などについて論じた。



なかむら・としえ

プロフィール

略歴：昭和41年大阪大学文学部哲学科心理学専攻卒業、昭和42年5月大阪大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程退学、同年6月大阪大学教養部助手、昭和53年8月同講師、昭和59年4月同助教授、平成4年博士（人間科学）、平成6年大阪大学人間科学部助教授、平成8年同教授、平成12年大学院人間科学研究科に配置換え、行動生態学講座に感性情報心理学分野を創設。この間、大阪大学大学院基礎工学研究科を兼任し（平成4～12年）、メディア教育開発センター研究開発部教授を務めるなど、聴覚心理学、音楽心理学、人間工学、ヒューマンインタフェースの研究と教育に41年間携わった。学内では各種委員会委員を歴任し、学外ではヒューマンインタフェース学会、日本認知心理学会、日本人間工学会の理事や評議員を務めるなどの学会活動を行なった。

循環器病学におけるIntegrated Medicineをめざして

大学院医学系研究科教授 堀 正 二

臨床医学は、病態の解析、治療法の開発のみならず、治療法の検証・定着まで包含した integrated medicine でなければならない。第一内科講座を担当して以来、循環器学の領域の中で、最も頻度の高い虚血性心疾患と心不全に重点を置いて integrated medicine をすすめてきた。虚血性心疾患では、心筋梗塞サイズの縮小をめざした治療法を開発するために虚血耐性メカニズムの解明、冠微小血管梗塞の検出と治療法の開発にとり組んだ。また、関連病院と前向き登録研究（OACIS8500 例）を立ち上げ、心筋梗塞のリスク因子としてのバイオマーカーの確立や遺伝子多型の同定（LTA 遺伝子多型）を行った。

心不全の領域では、 β 遮断薬治療の確立・普及や本邦における心臓移植を推進した。また、慢性心不全の予後を決定する心筋障害の進行メカニズムを解明するために不整脈源性右室心筋症（ARVC）や拡張期心不全（DHF）の動物モデルを確立し、心筋障害の分子機作を解明した。さらに、心臓移植症例の中から、脂肪酸代謝の遺伝子異常による新たな心筋症を見出した。Integrated medicine は、病態解析・診断と治療・検証の総合的実践医学を意味し、両者は各々、真（verum）と善（bonum）を求める姿勢を意味する。「真を求めて善をなす」ことが我々の成就しなければならない医学の道であることを最終講義で強調した。



ほり・まさつぐ

プロフィール

略歴：昭和 45 年大阪大学医学部卒業。昭和 53 年医学博士授与。昭和 53 年米国アルバートアインシュタイン医科大学に留学。平成 9 年大阪大学医学部内科学第一講座教授、平成 17 年講座再編により大阪大学大学院循環器内科教授。大阪大学医学部附属病院副院長。日本循環器学会理事、日本心不全学会理事長他、学会役員多数。平成 19 年日本内科学会会頭。平成 20 年 3 月大阪大学大学院循環器内科教授を退任後、4 月より大阪府立成人病センター総長。

身の上相談と小説の起源

大学院言語文化研究科教授 仙 葉 豊

意外なことのようにだが、現代でわれわれが新聞などで目にする「身の上相談」のコラムの起源は相当古く、ジャーナリズムがイギリスで起こってくる 17 世紀末にすでに存在していた。ジョン・ダントンという出版者は、1691 年から 97 年にかけて、『アテネ週報（Athenian Mercury）』という新聞を出して、その読者層の掘り起こしにこの「身の上相談コラム」を作ったといわれている。そのほぼ 10 年後にダニエル・デフォーは『レビュー誌（The Review）』という週 3 回出版の新聞を出し、これもまた、柔らかい息抜きとしての読み物として「身の上相談」の欄を作って、当時の読者たちのさまざまな悩み事を活字化し、新聞の読者の注目を集めている。デフォーはダントンの「身の上相談」欄をまねたといわれる。

ジャーナリストや商人として浮き沈みの多い人生を送っていたデフォーは、1719 年に『ロビンソン・クルーソー』というフィクションを書いて、以後、陸続として小説を出版していき、近代小説の祖として名を残していくことになるのだが、これら『レビュー誌』上で取り扱われた、さまざまな庶民の悩み事の“Case”の数々が、さらに、ほぼ 10 年後に爆発的に書かれていくことになる彼の小説の素材として使われている。この経緯を探ってみた。



せんば・ゆたか

プロフィール

略歴：昭和 48 年 3 月大阪大学文学部卒業、昭和 50 年 3 月大阪大学大学院文学研究科修士課程英文学専攻修了、昭和 50 年 5 月に大阪大学大学院文学研究科博士課程英文学専攻退学、昭和 50 年 6 月から防衛大学校人文科学教室助手、昭和 53 年 4 月から昭和 56 年 3 月まで同講師、昭和 56 年 4 月大阪大学言語文化部助教授、平成 5 年 4 月大阪大学言語文化部教授、平成 17 年 4 月大阪大学大学院言語文化研究科に配置換え。英文学、ことに 18 世紀イギリス小説史を中心に研究している。いわゆる「英国小説起源論」の中核をなすといわれる、ダニエル・デフォー、ジョナサン・スウィフト、サミュエル・リチャードソン、ヘンリー・フィールディングなどの作家の論文を書いている。なお、平成 20 年 4 月 1 日より、関東学院大学教授となっている。

想像力の問題

大学院言語文化研究科教授 津久井 定 雄

「想像力がたりない」という言葉をしばしば耳にする。この場合の「想像力」は社会的関係における想像力、すなわち社会的想像力を指している。今日まで、この種の想像力が体系的に研究されたことはない。「たりない」と言うからには、想像力の期待値とよぶべきものが想定されていると考えられる。期待を満たさないから、「たりない」と言われるのである。私たちは日常生活で会話の相手や出来事について何らかの物差し（解釈コード）を当てながら判断をしている。物差しや判断が適切でないと、期待値を満たすことができないで、「想像力がたりない」とみなされることになる。社会的想像力を働かせるのは、自己の周囲を秩序立ったものとして把握したいからである。すなわち社会的想像力には管理的想像力の一面がある。だれもが管理的想像力を日常的に働かせている。社会集団の管理部門が、管理技術のみにとらわれ、「何をなすべきか」を忘れると、社会的問題が起こることがある。これもまた「想像力の不足」に起因することと言える。教育においても社会的想像力の役割は大きい。想像力の問題はだれもが考えるべきことである。



つくい・さだお

プロフィール

略歴：昭和44年6月東京大学文学部第1類（哲学専修課程）卒業、昭和47年3月東京大学人文科学研究科比較文学比較文化専門課程修士課程修了、同年12月同博士課程退学、昭和48年1月東京大学助手文学部、昭和51年4月大阪大学講師言語文化部、昭和56年2月同助教授、平成4年4月同教授、平成7年4月大阪大学大学院言語文化研究科教授に配置換え。研究テーマは詩人プーシキン、作家ドストエフスキー、映画監督タルコフスキーの作品、トルストイの宗教思想、内村鑑三とロシアとの関係など。『神話の詩学』共訳によって著者エレアザール・メレンスキーを日本に紹介する。

私のDNAポリメラーゼ研究 — アルファからイータへ —

大学院生命機能研究科教授 花 岡 文 雄

私は大学院博士課程の頃、何となく高等真核細胞のDNA複製に興味を持ち、DNAポリメラーゼの研究に入ってしまった。当時は α 、 β 、 γ の3種類しか知られておらず、それぞれの生化学的な解析が中心であった。われわれは遺伝学的な解析も重要と考え、マウスの培養細胞を用いて温度感受性（temperature-sensitive; ts）変異株の分離・同定を行った。運よく α のts変異株を分離することが出来、ポリメラーゼ α が複製酵素であることを証明した。その後、研究テーマをDNA損傷の修復機構へと広げ、紫外線によって皮膚がんを高頻度に発症するヒト遺伝病のひとつ、色素性乾皮症（xeroderma pigmentosum; XP）の原因タンパク質の研究を行った。その中で、XPのバリエントと呼ばれる特殊なタイプでは紫外線による損傷を乗り越えることが出来ないことを見出した。その原因タンパク質を精製した結果、それが新しいタイプのDNAポリメラーゼであることが分かり、ポリメラーゼ η （イータ）と名付けた。その後、損傷を乗り越えるタイプのポリメラーゼが次々と発見され、がん、免疫、進化など様々な分野に展開を見せている。



はなおか・ふみお

プロフィール

略歴：昭和43年東京大学薬学部製薬化学科を卒業後、同大学院薬学系研究科に進学、昭和48年博士課程修了（薬学博士の学位取得）。同年同薬学部助手、昭和51年から53年米国ウィスコンシン大学マッカードル癌研究所博士研究員、昭和55年東京大学薬学部助教授を経て、平成元年理化学研究所放射線生物学研究室主任研究員。平成7年大阪大学細胞生体工学センター教授、平成14年同大学院生命機能研究科教授（配置換え）。この間、平成18年まで理化学研究所招聘主任研究員兼務。一貫して遺伝子DNAの複製と修復の研究に従事。日本薬学会奨励賞、内藤記念科学振興賞受賞。日本生化学会理事、日本分子生物学会会長など歴任。

蛋白質 X 線結晶構造解析 40 年

蛋白質研究所教授 月 原 富 武

構造生物学の黎明期に大阪大学薬学部で X 線結晶構造解析の手ほどきを受け、大学院生として蛋白質研究所でチトクロム c の X 線結晶構造解析に参画した。鳥取大学に職を得ることができて、蛋白質結晶学で身を立てる長期的な展望を持つことができた。チトクロム c の研究の後、光合成蛋白質であるフェルドキシン結晶構造解析を行った。構造生物学はより上位の階層を対象にする方向に進む必然性を持っていると考えて、巨大な複合体の結晶構造解析法を身につけるために米国のロスマン教授の所に留学し、球状ウイルスの X 線結晶構造解析を行った。現在もウイルス等の巨大な超分子の構造と構造形成の研究を展開している。一方、留学の少し前から甲南大学におられた吉川信也さんと呼吸酵素複合体であるチトクロム酸化酵素の X 線結晶構造解析に向けた共同研究を開始した。20 年近い努力を重ねて高等生物の最初の膜蛋白質の構造を決定することができた。この構造は 13 種 26 サブユニットという当時最も複雑な組成の蛋白質の構造解析としても注目された。その後、本酵素の精密構造解析に基づいてプロトンポンプ機構を提案し激しい論争を行う中で、「蛋白質場における化学」の構築を目指している。



つきはら・とみたけ

プロフィール

略歴：昭和 42 年 3 月大阪大学薬学部卒業、同年 4 月から昭和 45 年 12 月まで大阪大学大学院理学研究科高分子専攻修士課程および博士課程に在学した。在学中、カツオのチトクロム c の結晶構造解析に参画し、蛋白質結晶学の基礎をじっくり身につけることができた。この研究で昭和 49 年 3 月に大阪大学より理学博士の学位を取得した。博士課程を中退して、昭和 46 年 1 月より鳥取大学工学部工業化学科助手に採用され、蛋白質の X 線結晶構造解析を行った。昭和 48 年 2 月講師、昭和 53 年 4 月助教授に昇任し、昭和 53 年 2 月から昭和 55 年 2 月まで 2 年間米国パデュー大学の M.G.Rossmann 教授の所で博士研究員として球状ウイルスの X 線結晶構造解析に参画し、生体超分子の構造解析法を修得した。平成 3 年 4 月に徳島大学工学部生物工学科教授に就任し、平成 7 年 4 月からは大阪大学蛋白質研究所教授としてチトクロム酸化酵素やウイルスの構造研究を行った。平成 18 年 4 月から平成 20 年 3 月の退職まで大阪大学蛋白質研究所長を務めた。

材料研究に魅せられて

接合科学研究所教授 宮 本 欽 生

本年2月21日、学内外より多くの方々にご参加いただく中で、宮本先生の最終講義が執り行われました。初めに、接合科学研究所長野城清 教授より、研究経歴についてご紹介を頂くとともに、協力講座として携わった教育活動について、工学研究科環境・エネルギー工学専攻長西嶋茂宏教授よりお話を頂き、次いで講義が進められました。以下に内容などご紹介いたします。先生の研究生生活における出発点は、非晶質シリコンファイバーの気相成長に関する博士学位研究にありました。この取り組みは、ナノサイエンス・ナノテクノロジーの先駆として、今日も位置づけられております。その後、研究者として独立されてからは、超高圧における無機化合物の合成を手がけられ、針状ダイヤモンドを初め、パイロクロア型酸化物やキューバナイト相の新物質を合成されました。さらに、数々の新材料を創製する中で、セラミックスの燃焼合成同時焼結法を確立し、当時のセラミックス開発ブームを加速させる一連の研究を体系化されました。現在も国内で広く知られている「燃焼合成」の用語は、先生が命名されたものです。また、セラミックスの合成や焼成に関する学術研究を幅広く展開し、窒化珪素の助剤無添加焼結にも成功されました。このように、新素材の合成を精力的に進められる一方で、その構造形成に関する研究も、数多く手がけてこられました。金属とセラミックスの長所を併せ持つ、傾斜機能材料の研究開発を十数年にわたり進められ、世界に跨る研究コミュニティの形成にも尽力されました。近年では、高度情報化社会を支える材料創製に強い意欲を示され、新分野での研究を精力的に進められました。誘電体の周期的を有するフォトニック結晶の開発では、複雑なダイヤモンド構造を実現し、電磁波の伝播制御を実現されました。さらに、誘電体を用いて自己相似構造を形成し、共振により電磁波を閉じ込めるフォトニックフラクタルの開発にも成功されました。先生は最後に私たち後進への激励として、「がんばってもできないことをやろう」というお言葉を下さいました。多岐に渡る様々な研究を積極的に推進されてきたご経験から発せられる、極めてシンプルでありながら、まさに的確なご提言でありました。(文責：桐原聡秀)



みやもと・よしなり

プロフィール

略歴：昭和 42 年大阪大学基礎工学部材料工学科を卒業、昭和 44 年大阪大学大学院基礎工学研究科物理物理学専攻修士課程を修了し、同年ソニー株式会社中央研究所に研究員として就職した。昭和 47 年同社を退職し、大阪大学基礎工学部研究生を経て、昭和 51 年大阪大学教養部地学教室助手に採用され、同年 6 月に工学博士の学位を授与された。昭和 58 年大阪大学産業科学研究所助教授を経て、平成 9 年大阪大学接合科学研究所教授に昇任した。平成 14 年に同所附属再帰循環システム研究センター長となり、平成 15 年に改組新設された附属スマートプロセス研究センター長を平成 16 年まで務めた。学内では、研究推進室員、国際交流委員会委員、理工学研究戦略ワーキング主査、研究公正委員会規定作成ワーキング主査などを務めた。学外では、日本セラミックス協会理事、金属学会評議員、高温学会評議員、溶接学会評議員、粉体粉末冶金協会評議員などを歴任し、燃焼合成研究会会長、傾斜機能材料研究会副会長、等方圧加工研究会会長などを務めた。

先端材料研究と国際交流推進の輪の中で

留学生センター教授 古城紀雄

金属及びセラミックス材料の構造・組織制御により、期待される特性を発現させる指針を提供し、さらには新たな先進機能を有効に付与・活用するための基礎研究の推進は、マテリアル科学分野への優秀な人材の育成・提供とともに、材料系大学教員としての自身の使命である。この想いは、39年間途切れることがなかった。昭和44年、修士課程の後すぐに助手となり、自身の研究テーマを「超塑性変形機構解明」とした。金属材料は文字通り金属結合の故をもって室温でも塑性変形能を有する。この変形量には限界があるが、「超塑性化」することにより材料をまるでチューインガムのように低応力で何十倍の長さまで伸ばすことが出来る。この「超塑性」は工学的な材料組織制御により高温の応力下でも極めて安定な超微細結晶粒組織を実現した場合に適切な変形条件で発現する特性であり、一連の研究の結果、超塑性変形が結晶粒界でのすべり変形と直接関係するということを実証できた。また、従来塑性加工が困難とされていた金属間化合物やセラミックスも材料組織制御によって超塑性化でき、超塑性の工学的応用は飛躍的に拡大された。また、「超塑性材料工学特論」なる大学院講義を継続できたことも幸せであった。



後半20年間は留学生交流推進を軸とした教育・研究にも携わった。南カリフォルニア大学での1年間の経験も生かしながら、否応なしに国際的環境・多文化の中での活躍が期待されるであろう本学学生・院生のために積極的に邁進したと言える。本学に学び世界に巣立っていった留学生達も含めて、私自身と本学で時間を共有したみなさんや優秀な教え子達の大きな夢は実はこの私の夢であることをも思い、その意味ではさらに前へと考える毎日である。

ふるしる・のりお

プロフィール

略歴：富山大学から大阪大学大学院工学研究科冶金学専攻修士課程を経て昭和44年4月大阪大学助手となる。昭和56年7月に「超塑性変形の金属組織学的研究」により工学博士。昭和56年9月から1年間米国南カリフォルニア大学上級博士研究員、昭和63年6月工学部講師に昇進、助教授を経て平成6年6月に大阪大学留学生センター教授に昇任、同時に大学院工学研究科マテリアル科学専攻担当教授を兼任。平成13年度から5年間留学生センター副センター長、その後2年間センター長。なお、平成19年10月からは大阪大学世界トップレベル研究拠点免疫学フロンティア研究センター教授・事務部門長を兼任、平成20年4月より特任教授として専任。日本伸銅協会技術論文賞、軽金属学会論文賞等を受賞。学内では学生生活委員会副委員長、国際交流委員会副委員長、国際交流推進本部員となり、大阪大学学生海外研修助成プログラム実施・選考ワーキング主査等数々の部会、WGの座長を務めた。学外では文部科学省外国人留学生の選考等に関する調査研究協力者会議委員、同協力者会議日韓共同学部留学生事業部会会長、長期留学生派遣制度自然科学分野選考委員会主査など数多くの委員を務めた。また、超塑性国際会議国際諮問委員会委員事務局長、(社)軽金属学会理事・評議員を歴任し現在同関西支部長。さらに銅及び銅合金技術研究会理事・副会長。留学生教育・交流関係では、専門日本語教育学会会長、国立大学留学生指導研究協議会監事（平成11年度まで代表幹事）などを歴任。

レーザー核融合研究の黎明期に参画して

レーザーエネルギー学研究センター教授 西原功修

本年3月22日、同窓生・学内外関係者など多くの方々に御参加頂き西原先生の最終講義「プラズマと光と非線形性」が執り行われた。最初に、谷内俊弥先生、長谷川晃先生、山中千代衛先生といった大恩師への謝意を表され、その後、40年に渡る研究人生を聴講者と一体となって走馬灯を見るかのごとく饒々と語られた。大学院生時代の研究会で先生が経験された口角泡を飛ばす白熱した議論風景や、後に研究者となって無我夢中で研究に没頭する様が臨場感をもって我々聴衆のイメージとして再現する、そんな語り口調であった。非線形波動、レーザー核融合爆縮物理、流体不安定性、核融合燃焼、超高強度レーザーと物質との相互作用、イオン加速、極端紫外光源開発など、先生のカバーされた研究領域と成果は到底この紙面に表せるものでもなく、まさに圧倒的という他ない。講義の最後に、先生の今後の抱負と、これまでの研究人生にかかわってこられた方々への感謝の言葉を述べられ最終講義を締めくくられた。講義終了後、先生の御指導・御活躍に感謝の意を込め花束が贈呈され、会場からの盛大な拍手の中、閉会した。（文責：村上匡巨）



にしはら・かつぶ

プロフィール

略歴：昭和42年3月大阪大学基礎工学部電気工学科を卒業後、同年4月に大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻修士課程に入学し、昭和44年3月修了、同年4月同博士課程に入学し、昭和48年3月同課程を中退後、同年7月大阪大学より工学博士の学位を授与された。この間、昭和44年9月から昭和46年11月まで米国ベル研究所准研究員として研究に従事。昭和48年8月名古屋大学理学部助手として採用され、昭和51年9月大阪大学レーザー核融合研究センター講師、昭和53年2月同助教授、昭和59年5月同教授に就任した。平成16年4月にレーザーエネルギー学研究センターに改組された後は、光・量子放射学研究部門を担当した。また工学研究科電気電子情報工学専攻及び基礎工学研究科システム創成専攻の協力講座教授を兼任し、また核融合科学研究所客員教授をはじめ多くの大学で非常勤講師を勤めた。理論シミュレーションのリーダーとしてセンターの発展に尽力した。

春の褒章と叙勲

平成 20 年度の春の褒章及び叙勲受章者が発表され、本学関係の受章者は次の方々です。

大 貫 惇 睦 (大学院理学研究科教授)	紫 綬 褒 章
山 中 永之佑 (名誉教授)	瑞宝中綬章
荻 野 和 己 (名誉教授)	瑞宝中綬章
西 田 俊 夫 (名誉教授)	瑞宝中綬章
五十嵐 定義 (名誉教授)	瑞宝中綬章
松 本 仁 助 (名誉教授)	瑞宝中綬章
三 野 智 章 (元 学 生 部 次 長)	瑞宝双光章
曾 田 啓 莊 (元 歯 学 部 事 務 部 長)	瑞宝双光章
橋 本 和 定 (元産業科学研究所事務部長)	瑞宝双光章
瀬 戸 隆 男 (元工学部総務課車庫長)	瑞宝単光章

(総務部人事課)

永妻忠夫教授「第53回前島賞」受賞

基礎工学研究科の永妻忠夫教授が、郵政・電気通信・放送分野の功績者に贈られる第 53 回前島賞を受賞しました。

前島賞は、現在の郵便事業の基礎を築いた前島 密の偉業を顕彰し、その精神を伝承・発展させる目的でつくられたもので、昭和 30 年から実施されています。今回の受賞は、フォトリソ技術による未利用電磁波帯の開拓と無線通信への応用に関する先駆的研究への功績が認められたものです。

贈呈式は 3 月 11 日(火)、東京港区芝公園のメルパルク東京で執り行われました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)



左：永妻教授

土居幹嗣氏「日本化学技術有功賞」受賞

3月27日(木)立教大学池袋キャンパスで開催された日本化学会第88回春季年会で、理学研究科分析機器測定室技術補佐員の土居幹嗣氏（前理学研究科技術部技術長）が日本化学会平成19年度化学技術有功賞を受賞しました。

日本化学会化学技術有功賞は、化学及び化学技術に関連する業務にあたり装置・器具の開発・改良、特殊技能などにより特に貢献のあった者に授与されるものです。土居氏は長年に亘り理学研究科分析機器測定室において有機化学の研究に重要な位置を占め始めたNMRの測定に携わり、積算法の導入をはじめとする積極的な努力によって多くの化学系研究室の要求に応じて、広範囲な研究を支えてきました。その後、超伝導磁石を備えた高磁場装置とパルス系列の導入によってNMRは大きく変貌し、ますますその重要性を増したが、土居氏は一貫してこの分野で力を発揮しました。特に、高度な技術と熟練を要求される固体NMR装置を担当して以来、この分析法の発展とともに歩み、理学研究科における化学系分野の研究に際立った貢献を果たしてきました。今回の受賞は、生体膜や金属錯体、高分子化合物など様々な試料の測定に際して、土居氏が独自の創意工夫を発揮して問題点を克服してきたことが高く評価された結果であります。以下に土居氏の数多い成果・貢献の中から代表的な例を紹介します。

1. ^{13}C 緩和時間測定による炭酸塩－タンパク質相互作用解析法
2. 長時間 CP-MAS 測定のためのパルスシーケンスの改善
3. 重水素固体 NMR 測定における膜結合性分子の運動性評価

受賞題目は高感度固体 NMR スペクトル測定を通じた化学研究への貢献
(理学研究科・理学部)



右：土居氏



中西周次助教「電気化学会進歩賞・佐野賞」受賞

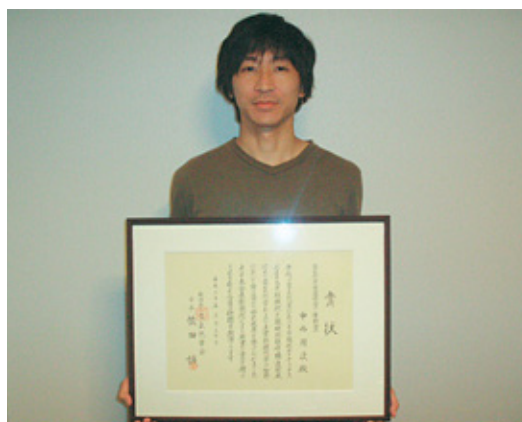
基礎工学研究科の中西周次助教が電気化学会進歩賞・佐野賞を受賞しました。

この賞は、電気化学および物理化学に関する研究または、新しい技術の開発を進め、その進歩が顕著であると認められる者に授与される賞です。

今回対象となったのは、電気化学における非線形ダイナミクスによる自己組織化と微視的秩序構造形成に関する研究です。

授賞式は、3月30日(日)に山梨大学で開催された電気化学会第75回大会で行われました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)



奥山雅則教授「JJAP編集貢献賞」受賞

Japanese Journal of Applied Physicsの編集の貢献者に与えられる第6回 JJAP 編集貢献賞授賞式が4月11日(金)、東京都港区元赤坂の明治記念館で執り行われ、基礎工学研究科の奥山雅則教授が受賞しました。

JJAP 編集貢献賞は、(社)応用物理学会英文学術誌の編集・閲読について1998～2006年の間に多大な貢献をした者に贈られる賞です。

(基礎工学研究科・基礎工学部)



赤井伸郎准教授「第48回エコノミスト賞」受賞

国際公共政策研究科の赤井伸郎准教授が、著書『行政組織とガバナンスの経済学』において、毎日新聞社主催「第48回(2007年度)エコノミスト賞」を受賞しました。エコノミスト賞は、日本経済および日本経済と世界経済の関連についての「現状分析」を前進させる目的で、1960年に創設されたものです。毎年、その年度に発表された著書・論文のなかから、最も清新な業績をうちたてた作品に授与され、これまでに多くの有為な人材を世に送り出しており、一般に「経済論壇における芥川賞」と評されています。

今回の受賞は、公共経済学の中でも、あまり日の当たらない地方の問題を中心に、第三セクターや地方公社を詳細なデータではじめて分析したことが評価されました。受賞作は、第三セクターなどのほか、公営企業や自治体本体、独立行政法人などについても、理論・実証の両面から分析し、なぜ、こうした組織がうまく機能しないのか、官民の役割分担はどうあるべきかなどを、現場取材も駆使して探っています。授賞式は、4月18日(金)に東京都の如水会館にて行われ、賞状、盾、賞金が授与されました。



右：赤井准教授

(国際公共政策研究科)

「文部科学大臣表彰」受賞

森 勇介教授、高野和文准教授、安達宏昭特任准教授、井上 豪教授、松村浩由助教、松永幸大講師、村橋哲郎准教授、櫛引俊宏特任講師の工学研究科教員8名が、平成20年度科学技術分野の文部科学大臣表彰を受賞しました。この賞は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的とするもので、森教授、高野准教授、安達特任准教授、井上教授、松村助教が「高精度構造解析用革新的タンパク質結晶化と加工技術の研究」に関する業績で「科学技術賞（研究部門）」を受賞しました。

また、40歳未満の若手研究者を対象とした「若手科学者賞」を、松永講師が「超顕微技術による染色体形態構築メカニズムの研究」に関する業績で、村橋准教授が「サンドイッチ型金属クラスターの研究」に関する業績で、櫛引特任講師が「ドラッグデリバリーと光技術による細胞機能制御の研究」に関する業績で受賞しました。

表彰式は、平成20年度（第49回）科学技術週間特別行事の一環として4月15日（火）に虎ノ門パストラルにおいて行われ、翌16日（水）には、工学研究科の受賞者が鷺田清一総長と西尾章治郎理事・副学長を訪問して報告をし、記念撮影を行いました。

（工学研究科・工学部）



前列左から、森教授、西尾理事・副学長、鷺田総長、高野准教授
後列左から、松永講師、村橋准教授、井上教授、櫛引特任講師

産業科学研究所の西野邦彦助教が、平成20年度文部科学大臣表彰若手科学者賞を授賞しました。今回の受賞は「細菌ゲノムに潜む多剤耐性因子と制御機構の研究」の業績が評価されたもので、細菌ゲノムに潜む数多くの薬剤耐性因子を同定し、耐性因子が情報伝達により制御されていること、また薬剤排出蛋白質が薬剤耐性のみならず細菌病原性発現にも関与していることを発見したものです。この研究成果は、従来、予測が困難だった薬剤耐性菌の出現予測に役立つだけでなく、薬剤耐性菌による感染症を克服するための有用な情報になりうると期待されています。表彰式は、4月15日（火）虎ノ門パストラルにて行われました。

（産業科学研究所）



この度、高校生のためのスーパーコンピューティングコンテスト（通称：「夏の電腦甲子園」）を主催していた本学サイバーメディアセンター大規模計算科学研究部門の菊池 誠教授および東京工業大学学術国際情報センター渡邊 治教授、同センター松田裕幸助教の3名が、「スーパーコンピュータによる計算機科学への理解増進」に寄与した功績により、平成20年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）を受賞しました。

スーパーコンピューティングコンテストは、高校生を対象としたプログラミングコンテストであり、スーパーコンピュータを使用して与えられた課題の解答法をプログラミングし、そのプログラムによる課題に対する解答の正確さと速さを競うものです。本コンテストは平成7年度から東京工業大学の主催で開催され、大阪大学は平成18年から共催、平成19年度から共同主催となり、コンテスト会場を東は東京工業大学、西は大阪大学に分け開催しています。平成19年度のコンテストにおいては本選出場校数15校20チームの内大阪大学会場には8校10チームが出場し、サイバーメディアセンターのスーパーコンピュータを使用して実施されました。

（サイバーメディアセンター）



第2回大阪大学近藤賞授与式開催

4月17日(木)から18日(金)にかけて銀杏会館で開催されたレーザー研シンポジウムにおいて、第2回大阪大学近藤賞の授与式が行われました。

大阪大学近藤賞は、平成5年にレーザーエネルギー学研究センターに配属され、志半ばにして交通事故により亡くなった学生のご遺族の寄附により、同じ志を持つレーザーエネルギー学研究に進む若手学生・技術者及び研究者を奨励するもので、受賞者には賞状と副賞として50万円の奨学金が授与されます。

授与式では、寄附者である近藤ご夫妻もご臨席のなか、科学賞及び技術賞の各受賞者には、鷲田清一総長より、賞状と副賞が授与されました。引き続き、鷲田総長が近藤ご夫妻へ謝辞を述べ、最後に、受賞者2名（科学賞受賞：理化学研究所研究員・藤 貴夫、技術賞受賞：大阪大学大学院工学研究科准教授・吉村政志）を囲んで、鷲田総長、三間園興センター長、岸本泰明審査委員長（京都大学）、近藤ご夫妻で記念写真の撮影が行われ授与式は終了しました。

（レーザーエネルギー学研究センター）



前列：左から鷲田総長、受賞者（藤、吉村）、近藤夫妻
後列：岸本審査委員長、三間センター長

村上孝三教授、柳田 剛助教「総務省・戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE)」研究開発課題に採択

情報科学研究科の村上孝三教授及び産業科学研究所の柳田 剛助教が、総務省の戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE※)による研究開発課題に採択され、授与式が5月15日(木)に本学で開催されました。(※ Strategic Information and Communications R&D Promotion Programme)

この戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE)は、情報通信(ICT)分野の研究開発における競争的資金制度で、ICT分野のイノベーションを生み出すことを目指し、総務省が定めた戦略的な重点研究開発目標を実現するための独創性・新規性に富む研究開発を支援する制度です。

授与式には、久保田誠之近畿総合通信局長が来学され、西尾章治郎理事・副学長の出席のもと、新規研究開発課題に採択された村上教授及び柳田助教に採択通知が手渡されました。

研究開発課題は、以下のとおりです。

○ 村上孝三 教授

「新世代ネットワークに向けた自律的サービス制御プラットフォームの研究」

○ 柳田 剛 助教

「無線・有機融合型ヘテロナノワイヤのネットワーク構造体を用いた超 Tbit 級不揮発性メモリ素子の研究開発」

(研究推進部研究推進課)



写真左から、西尾理事・副学長、久保田局長、村上教授、柳田助教

花村周寛特任助教「あっ!!と驚く位置利用サービスアイデア大募集」最優秀賞受賞

コミュニケーションデザイン・センターの花村周寛特任助教が、(財)衛星測位利用推進センター (<http://www.eiseisokui.or.jp/ja/>) が公募していた、「あっ!!と驚く位置利用サービスアイデア大募集」において、最優秀賞を受賞されました。

現在の衛星測位 (GPS) では誤差が大きく細かい位置検出が出来ませんが、2009 年度に打ち上げ (目標) が予定されている準天頂衛星 (新しい測位衛星) により、測位の精度が大幅に向上し、1m 以内の精度で正確に位置を検出することが可能になることが見込まれています。そのことにより考えられる画期的な位置利用のアイデアが今回公募され、72 件の応募の中から最優秀賞を受賞されました。

提案は「parallel scape 都市空間の新しい楽しみ方」というタイトルで、GPS (Global Positioning System) と GIS (Geographical Information System)、情報通信技術、ヒューマンインターフェイスといった技術を、専門である風景デザインやコミュニケーションデザインの視点からオンラインゲームに統合するという内容で、まちづくりや防災やファッションデザイン分野にも展開できるビジネスモデルの提案もされました。演劇的に都市空間を楽しむことが出来る提案で、配信されるコンテンツによって都市空間に違った意味を与え続けることで、同じ場所でも違った風景としてデザインすることを目指しています。大阪市立大学の森洋久准教授との共同受賞です。5月7日(水)に東京四谷スクワール麹町にて授賞式が行われました。

(コミュニケーションデザイン・センター)



森栗茂一教授「第11回交通工学研究会 (国土交通省・警察庁所轄) 技術賞」受賞

コミュニケーションデザイン・センター (CSCD) の森栗茂一教授が、「第11回交通工学研究会 (国土交通省・警察庁所轄) 技術賞」を受賞しました。

この賞は、交通工学研究会の機関誌「交通工学」第42巻に掲載された「報告」・「紹介」の中から、交通工学の発展に顕著な貢献をなした実務的・先進的な技術や施策への取り組みに対して贈られるもので、今回、第42巻1号に掲載された『くるくるバスを活かした持続可能な地域づくり』が対象となり、地元のくるくるバスを守る会 (神戸市東灘区) と共同受賞し、5月27日(火)、尚友会館 (東京都千代田区) で表彰式が行われました。

受賞内容は、地域の交通を住民協働でつくることで、黒字になるまで利用が増え、クルマに頼り過ぎない地域が持続することを証明し、全国的な団地再生のモデルを提案することにより、コミュニケーションデザイン力が交通工学の現場技術として高く評価されました。この成果は、地域公共交通の活性と再生に関する法律に大きな影響を与えました。

同教授は、今後も多様な専攻の学生と一緒に住民協働のまちづくりに参画し、現場から社会学連携の教育研究を進めたいと抱負を語りました。

(コミュニケーションデザイン・センター)



左側から森栗教授、バスを守る会の奥田久男氏、
みなと観光バス社長の松本浩之氏

伊藤龍象名誉教授(基礎工学部)逝去



本学名誉教授伊藤龍象先生は4月18日(金)、膵臓癌のため逝去されました。享年79歳でした。

先生は、昭和28年京都大学工学部工業化学科を卒業され、同大学院研究奨学生を経て、昭和30年京都大学工学部助手となられた後、同講師、助教授を経て、昭和43年12月に大阪大学基礎工学部教授に昇任され、化学工学科反応工学第一講座(昭和63年から移動現象論講座と改称)を担当されました。平成3年3月末をもって本学を退官されましたが、同年4月1日より高知工業高等専門学校校長に就任され、平成9年3月末に退官されました。この間、大阪大学におかれましては本学評議員、総長補佐、基礎工学部会計委員会委員長などを務められ、学外におかれましては、

化学工学会(旧 化学工学協会)の副会長、理事、評議員、英文誌編集委員会副委員長、関西支部副支部長などを歴任されるとともに、工業技術院東京工業試験所(現 化学技術研究所)や電子技術総合研究所の研究員として産官学の共同研究に尽くされました。温厚誠実な人柄と冷静な判断により、大学並びに学会に多大の貢献をしてられました。

先生の化学工学における業績は多岐にわたりますが、大別すれば不可逆過程の熱力学に基づく分離操作、流動機構を踏まえた移動現象の解析、エネルギー変換プロセスの最適設計に大別されます。とくに、熱拡散や電気泳動による分離過程に対してエントロピー効率を導入して高度分離場を構築する手法を確立されたほか、電極反応の特性を巧みに利用した流体速度、剪断速度、局所物質移動速度の測定、流れの可視化など巧みな実験手法と独創的な発想を組み合わせ、化学装置内の移動現象の解明を行われたほか、レドックス・フロー電池システムの化学工学的解析と最適化に関する研究を行われるなど、精密化学工学の発展に多大の貢献をされてられました。

これらのご功績に対し、平成2年度には化学工学会より学会賞、平成15年には勲三等旭日中綬章が授与されています。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

伏見康治名誉教授(理学部)逝去



本学名誉教授伏見康治先生は、5月8日(木)午後8時17分、老衰のため逝去されました。享年98歳でした。

先生は、昭和8年に東京帝国大学理学部物理学科をご卒業後、昭和9年に大阪帝国大学理学部の助手として赴任されました。その後講師、助教授を経て昭和15年に大阪帝国大学理学部教授に昇任されました。昭和34年には理学部長も務められ、大阪大学の発展にご尽力下さいました。

先生の物理学研究は、理論、実験の両面で広い範囲に及んでおります。原子核の分野では、重水に重陽子イオンを

衝突させ、生成された中性子が原子核に捕獲される際に発生するガンマ線を測定するという、当時の最先端を行く実験を遂行されました。統計力学の分野では密度行列を深く研究され、密度行列の「縮約」や母関数の方法を発展させ、相互作用する多粒子系に対する、任意の温度でのハートリー・フォック近似の方法を提示されました。気体凝縮理論に関連して、クラスター積分を既約積分の和として表す先生の方法は、「伏見の木」として知られています。統計力学的模型においても、「蜂の巣格子」、「三角格子」、「カゴ目格子」等々、ユニークな研究が伏見グループから生まれました。「場の理論における変分原理について」という先生の論稿は、素粒子論研究にも影響を与えました。

先生は日本の原子力政策でも指導力を発揮され、昭和29年に学術会議に提出した「原子力憲章草案」が、翌年の原子力基本法に盛り込まれたことはよく知られているところです。このように先生は、物理学研究ならびに社会的活動の両面において顕著なご功績を残され、紫綬褒章、藤原賞、米国核融合協会F・P・A功労賞、勲二等旭日重光章をそれぞれ受賞されました。ここに謹んで伏見康治先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(理学研究科・理学部)

新部局長紹介

三 浦 利 章 (みうら としあき)

大学院人間科学研究科長・人間科学部長



【略歴】

- 昭48. 3 名古屋工業大学経営工学科卒業
- 48. 4 大阪大学文学部研究生 (昭49.3まで)
- 51. 3 大阪大学大学院文学研究科(前期課程)心理学専攻修了
- 53. 3 大阪大学大学院文学研究科(後期課程)心理学専攻退学
- 53. 4 大阪大学助手人間科学部
- 平元. 6 大阪大学講師人間科学部
- 3. 5 大阪大学助教授人間科学部
- 7. 4 大阪大学教授人間科学部
- 12. 4 大阪大学教授大学院人間科学研究科
- 15. 4 大阪大学評議員 (平16.3まで)
- 16. 4 大阪大学教育研究評議員 (平18.3まで)
- 20. 5 大阪大学大学院人間科学研究科長・人間科学部長 (平22.4まで)

新施設長紹介

安 蘇 芳 雄 (あそ よしお)

産業科学研究所附属材料解析センター長



【略歴】

- 昭52. 3 大阪大学理学部化学科卒業
- 54. 3 大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻修士課程修了
- 56. 2 大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻博士課程退学
- 56. 2 名古屋大学教務職員化学測定機器センター
- 58. 3 理学博士 (大阪大学)
- 58. 4 広島大学助手工学部
- 平 6. 5 広島大学助教授工学部
- 10. 4 九州大学助教授有機化学基礎研究センター
- 12. 4 広島大学助教授工学部
- 13. 4 広島大学助教授大学院工学研究科
- 15. 2 大阪大学教授産業科学研究所
- 20. 4 大阪大学産業科学研究所附属材料解析センター長 (平22.3まで)

新教授紹介

服 部 典 之 (はっとり のりゆき)

大学院文学研究科



【略歴】

- 昭56. 3 大阪大学文学部卒業
- 58. 3 大阪大学大学院文学研究科英文学専攻博士前期課程修了
- 59. 3 大阪大学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程退学
- 59. 4 和歌山大学助手教育学部
- 62. 4 大阪大学講師言語文化部
- 平 4. 4 大阪大学助教授言語文化部
- 12.10 大阪大学助教授大学院文学研究科
- 15. 2 博士 (文学) (大阪大学)
- 19. 4 大阪大学准教授大学院文学研究科
- 20. 4 大阪大学教授大学院文学研究科

所 属：大学院文学研究科文化表現論専攻西洋文学・語学講座
専門分野：英米文学

新教授紹介

浜 渦 辰 二 (はまうず しんじ)

大学院文学研究科



【略歴】

- 昭51. 3 静岡大学人文学部卒業
- 51. 4 九州大学文学部研究生 (昭和52.3まで)
- 55. 3 九州大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了
- 59. 3 九州大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位修得退学
- 59. 4 日本学術奨励会研究員 (昭和59.8まで)
- 59.10 ドイツ・ケルン大学及びヴッパータール大学留学 (昭和61.3まで)
- 61.10 九州大学文学部研究生 (昭和62.3まで)
- 62. 4 西南学院大学非常勤講師 (平成元.9まで)
- 平成.10 九州大学助手文学部
- 3. 4 静岡大学助教授人文学部
- 8. 4 静岡大学教授人文学部
- 7. 3 博士 (文学) (九州大学)
- 20. 4 大阪大学教授大学院文学研究科

所 属：大学院文学研究科文化形態論専攻哲学講座
専門分野：臨床哲学

三 谷 研 爾 (みたに けんじ)

大学院文学研究科



【略歴】

- 昭59. 3 大阪大学文学部卒業
- 61. 3 大阪大学大学院文学研究科独文学専攻博士前期課程修了
- 62. 3 大阪大学大学院文学研究科独文学専攻博士後期課程退学
- 62. 4 大阪府立大学助手総合科学部
- 平成.12 大阪府立大学講師総合科学部
- 12. 4 大阪大学助教授大学院文学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院文学研究科
- 20. 3 博士 (文学) (大阪大学)
- 20. 4 大阪大学教授大学院文学研究科

所 属：大学院文学研究科文化表現論専攻西洋文学・語学講座
専門分野：ドイツ文学

芝 井 広 (しばい ひろし)

大学院理学研究科



【略歴】

- 昭53. 3 京都大学理学部卒業
- 55. 3 京都大学大学院理学研究科物理学第二専攻修士課程修了
- 57. 3 京都大学大学院理学研究科物理学第二専攻博士後期課程中途退学
- 57. 4 宇宙科学研究所宇宙圏研究系助手
- 平 5. 2 博士 (理学) (東京大学)
- 6. 7 宇宙科学研究所共通基礎研究系助教授
- 9. 4 名古屋大学教授大学院理学研究科
- 20. 4 大阪大学教授大学院理学研究科

所 属：大学院理学研究科宇宙地球科学専攻宇宙惑星進化化学講座
専門分野：赤外線天文学、星間物質、系外惑星系

新教授紹介

廣 田 和 馬 (ひろた かずま)

大学院理学研究科



【略歴】

- 昭63. 3 慶應義塾大学理工学部物理学科卒業
- 平 2. 3 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻修士課程修了
- 5. 3 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程修了
- 5. 4 米国ブルックヘブン国立研究所Research Associate
- 6.12 米国ブルックヘブン国立研究所Assistant Physicist
- 7. 4 東北大学助手大学院理学研究科
- 10.10 東北大学助教授大学院理学研究科
- 14.10 東京大学助教授物性研究所
- 19. 4 東京大学准教授物性研究所
- 20. 4 大阪大学教授大学院理学研究科

所 属：大学院理学研究科宇宙地球科学専攻極限物質学講座
専門分野：中性子・X線散乱を用いた凝縮系の構造物性研究

土 岐 祐一郎 (どき ゆういちろう)

大学院医学系研究科



【略歴】

- 昭60. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 61. 7 公立学校共済組合近畿中央病院外科
- 平元. 7 大阪大学医学部研究生（第二外科）
- 5.10 米国コロンビア大学Presbyterian癌センター研究員
- 5.12 医学博士（大阪大学）
- 8. 9 大阪大学助手医学部
- 16. 8 大阪大学講師大学院医学系研究科
- 17. 4 大阪大学助教授大学院医学系研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院医学系研究科
- 20. 5 大阪大学教授大学院医学系研究科

所 属：大学院医学系研究科外科学講座（消化器外科学Ⅱ）
専門分野：消化器外科

竹 重 文 雄 (たけしげ ふみお)

歯学部附属病院



【略歴】

- 昭60. 3 大阪大学歯学部卒業
- 60. 4 大阪大学歯学部研究生
- 61. 4 大阪大学歯学部附属病院医員
- 63. 7 大阪大学助手歯学部附属病院
- 平 6. 1 歯学博士（大阪大学）
- 6. 8 大阪大学講師歯学部附属病院
- 20. 4 大阪大学教授歯学部附属病院

所 属：歯学部附属病院口腔総合診療部
専門分野：歯科保存学

新教授紹介

荒 木 秀 樹 (あらき ひでき)

大学院工学研究科



所 属：大学院工学研究科附属原子分子イオン
制御工学センター極限微小構造研究
部門原子欠陥評価信頼性診断分野
専門分野：材料科学

【略歴】

- 昭60. 3 大阪大学工学部金属材料工学科卒業
- 62. 3 大阪大学大学院工学研究科金属材料工学専攻前期課程
修了
- 62. 4 住友電気工業(株)ダイヤ製品開発部(専門職)
- 63. 6 大阪大学助手工学部
- 平 6. 3 博士(工学)(大阪大学)
- 10. 4 大阪大学助手大学院工学研究科
- 11. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科
- 15. 4 大阪大学助教授大学院工学研究科附属原子分子イオン
制御工学センター
- 19. 4 大阪大学准教授大学院工学研究科附属原子分子イオン
制御工学センター
- 20. 5 大阪大学教授大学院工学研究科附属原子分子イオン制
御工学センター

有 川 友 子 (ありかわ ともこ)

留学生センター



所 属：留学生センター留学生交流指導部門
専門分野：教育人類学、異文化間教育学

【略歴】

- 昭60. 3 東京外国語大学英米語学科卒業
- 60. 4 熊本商科大学(現熊本学園大学)国際交流室
- 平 2. 5 米国イリノイ大学教育学研究科教育心理学専攻修士課程
修了
- 5.10 米国イリノイ大学教育学研究科教育心理学専攻博士課程
修了
- 5.10 Ph.D. in Education (米国イリノイ大学)
- 6. 4 熊本学園大学講師外国語学部
- 10. 3 大阪大学助教授留学生センター
- 19. 4 大阪大学准教授留学生センター
- 20. 4 大阪大学教授留学生センター

近 藤 佐知彦 (こんどう さちひこ)

留学生センター



所 属：留学生センター留学生交流指導部門短
期留学担当
専門分野：留学生教育、ディスコース分析、社会
心理学

【略歴】

- 昭60. 3 大阪大学人間科学部人間科学科卒業
- 60. 4 (株)新潮社週刊新潮編集部員
- 平 5. 4 (株)新潮社週刊新潮編集委員
- 7. 9 英London大学London School of Economics:
Department of Social Psychology修士課程修了
- 12. 6 英Loughborough大学Department of Social Sciences博士
課程修了
- 12. 6 PhD (Social Science) (Loughborough University (UK))
- 13. 4 大阪大学助教授留学生センター
- 19. 4 大阪大学准教授留学生センター
- 20. 4 大阪大学教授留学生センター

新教授紹介

早 田 幸 政 (はやた ゆきまさ)

大学教育実践センター



【略歴】

- 昭52. 3 中央大学法学部卒業
- 55. 3 中央大学大学院法学研究科修了
- 55. 4 地方自治総合研究所常任研究員
- 60. 1 (財)大学基準協会事務局職員
- 平 9.12 (財)大学基準協会高等教育研究部門職員
- 13. 7 (財)大学基準協会大学評価・研究部部長
- 15.11 金沢大学教授大学教育開発・支援センター
- 16. 4 金沢大学大学教育開発・支援センター副センター長
(平20.3まで)
- 20. 4 大阪大学教授大学教育実践センター

所 属：大学教育実践センター高等教育研究開発部門

専門分野：高等教育論、大学評価制度、教育法

人権問題に関する講演会

人権問題に関する啓発行事の一貫として、講演会を開催いたします。

今回は、アカデミック・ハラスメント問題をテーマとして取り上げます。

教職員・学生の方の積極的な参加をお待ちしております。また、近隣地域の方々にも多数ご参加いただきますようご案内いたします。

- 日 時 7月24日(木) 15時30分～17時
- 会 場 基礎工学部シグマホール
- 講 師 養 父 知 美 弁護士
- 演 題 「アカデミック・ハラスメントのないキャンパスを目指して」
- 問い合わせ先 大阪大学総務部総務課総務係 (TEL: 06 - 6879 - 7014)

(人権問題委員会)

今年も「阪大船」が出船します!! (天神祭船渡御)

船渡御は、日本三大祭の一つである大阪天神祭のクライマックスを彩り、意匠を競った百隻余りの船が大川を行き交います。

大阪大学では、『阪大船』の装いも新たに、第4回目となる今年もその勇姿を大川の川面に浮べ、訪れる人たち、市民の皆様方に広くアピールします。

教職員、学生、同窓生等の阪大ファミリーの皆様方には、多数ご乗船いただき、大阪の夏の風物詩を心ゆくまで楽しんでいただきたいと思います。

日 時: 7月25日(金) 18時～21時頃

〈問い合わせ先〉詳しくは下記までお問い合わせください

大阪大学天神祭実行委員会

(大阪大学総務部評価・広報課広報・社会学連携事務室)

〒565-0871 吹田市山田丘1-1

TEL 06-6879-7151

FAX 06-6879-7156

E-mail NOSE-N@star.jim.osaka-u.ac.jp



(総務部評価・広報課広報・社会学連携事務室)

第1回適塾講座の受講者募集について

適塾記念会では、適塾顕彰事業の一環として、緒方洪庵と塾生の足跡をたどり、適塾が果たした歴史的役割を考えるため、今年度より新たに適塾講座を開講することとしました。

これは、昨年度までの適塾研究会をうけて行われるものです。単なる講演会ではなく、講師と受講生がともに適塾を考える講座です。そのため、質疑応答の時間をできるだけ多くとっています。多くの方々のご参加をお願いいたします。

1. テーマ 「幕末の大坂社会と適塾」

適塾は、幕末期大坂に開かれた蘭学塾である。幕府直轄都市大坂は、政治的・軍事的・経済的にきわめて重要な地であるとともに、最高水準の文化都市でもあった。適塾をとらえるには、何よりも、幕末大坂社会の特質とのかかわりにおいて考える必要がある。今回は、大坂の学問的伝統、大坂町人社会の特質、幕府の大坂支配という側面から、適塾を取り上げる。

2. 講演日時等

- | | | |
|-----|----------------------|------------------------|
| 第1回 | 9月2日(火) 18:00～19:30 | |
| | 「適塾と大坂町人社会」 | 中川 すがね氏(甲子園大学人文学部准教授) |
| 第2回 | 10月7日(火) 18:00～19:30 | |
| | 「大坂の学芸社会と適塾」 | 有坂 道子氏(京都橘大学文学部准教授) |
| 第3回 | 11月4日(火) 18:00～19:30 | |
| | 「幕府の大坂支配と適塾」 | 村田 路人氏(大阪大学大学院文学研究科教授) |

3. 会場 大阪大学中之島センター 大阪市北区中之島4丁目3番53号 06-6444-2100

- 《地下鉄》・四ツ橋線 肥後橋駅(3番出口)より西へ徒歩約10分
・御堂筋線 淀屋橋駅(4番出口)より西へ徒歩約16分
《市バス》・大阪駅前 53・75系列(船津橋行き等)
玉江橋バス停下車徒歩約1分
《JR》・大阪環状線 福島駅より南へ徒歩約12分
・東西線 新福島駅(2番出口)より南へ徒歩約9分
《私鉄》・阪神電鉄 福島駅より南へ徒歩約9分
・京阪電鉄 淀屋橋駅より西へ徒歩約17分

4. 定員 50名(申込先着順)

5. 申込方法 郵便葉書に住所、氏名、電話番号をご記入の上、7月4日(金)までにお申し込み下さい。 受講者には追ってご案内と受講カードをお送りいたしますので、受講料を指定の銀行口座にお振り込み下さい。

6. 受講料 3,000円(3回分)

7. 対象 適塾記念会の会員の方(新規加入者を含む。)

申込・お問い合わせ 適塾記念会事務局
〒565-0871 吹田市山田丘1-1 大阪大学コンベンションセンター
電話: 06-6877-9852

(適塾記念会)

大阪大学基礎工学部 第30回公開講座
「未来を拓く先端科学技術」

■公開講座の目的

私たちの生活は科学技術によって支えられており、その進歩と密接な関係をもっています。特に日常生活に直接関係する機器や物質の目覚ましい発展と普及、情報技術の急速な進歩とそれにより得られる膨大な情報、生命の謎の解明と先端医療技術、これらに囲まれた私たちの日常生活を安全で豊かなものにするには、それにふさわしい教育と知識を備えることが必要です。このような環境の中、若い人々から家庭の主婦ならびに学校教育を離れて久しい中高年の方々にいたる広い範囲で、科学的教養を積む機会を望む声が高まっています。大阪大学基礎工学部ではこのような声に応えるべく、あわせて従来とかく軽視されがちであった大学と地域社会との連帯を強めるとともに本学部の情報発信の一環として、1979年以來29回にわたり公開講座を開催してきました。

本年度（第30回）も、様々な立場から私たちの暮らしや社会と密接な関係を持ち、明るい未来を拓く最先端の科学技術の成果とその意義を紹介する企画を行います。

■期 間：8月4日(月)～7日(木)

■会 場：大阪大学基礎工学部 国際棟（シグマホール）

■受講料：無料

8月4日(月)

- 10:00～ 開講式
10:20～11:50 ゼオライト ―規則性ナノ空間が創り出す新しい反応と分離―
化学工学領域 反応化学工学講座 准教授 西山 憲和
13:15～14:45 統計的シミュレーション ―乱数生成から問題解決まで―
数理科学領域 統計数理講座 准教授 坂本 亘
15:00～16:00 見学会

8月5日(火)

- 10:20～11:50 音声と画像のデジタル処理 ―デジタル信号処理が開く新しいメディア環境―
システム科学領域 システム理論講座 准教授 中静 真
13:00～14:30 モデル検査技術の紹介 ―モデル検査ツールを使って様々な問題を解く―
情報科学研究科 ソフトウェア設計学講座 准教授 岡野 浩三
14:45～15:45 見学会

8月6日(水)

- 10:20～11:50 脳はどのようにして出来上がるのか？ ―神経細胞の生まれと育ち―
生命機能研究科 脳神経工学講座 准教授 田辺 康人
13:00～14:30 新時代のシリコントランジスタ ―結晶技術を駆使して高性能化を―
電子光科学領域 固体電子光学講座 教授 酒井 朗
14:50～16:20 廃棄物を出さない化学合成プロセスの開発 ―金属クラスター触媒で酵素に挑む―
機能物質化学領域 合成化学講座 准教授 大嶋 孝志

8月7日(木)

- 10:20～11:50 量子とは何だろうか？それを使った革命的情報処理とは何だろうか？
物性理工学領域 ナノ量子物理講座 教授 井元 信之
13:00～14:30 医用計測と臨床診断をつなぐ生体力学シミュレーション
生体工学領域 生体機械科学講座 教授 和田 成生
14:45～15:45 見学会

■受付開始：7月1日(火)から

■問い合わせ先：大阪大学基礎工学部研究科庶務係

〒560-8531 豊中市待兼山町1-3 TEL:06-6850-6131 FAX:06-6850-6151

E-mail: KISOKOU-S@star.jim.osaka-u.ac.jp URL: http://www.es.osaka-u.ac.jp

(基礎工学研究科・基礎工学部)

平成20年度大阪大学大学院言語文化研究科公開講座
「教員のための英語リフレッシュ講座」

日程：8月11日（月）、12日（火）、13日（水）、14日（木）
会場：大阪大学中之島センター（大阪市北区中之島4-3-53）
主催：大阪大学大学院言語文化研究科
後援：大阪府教育委員会・兵庫県教育委員会

平成20年度の大学院言語文化研究科主催の公開講座が大阪大学中之島センターにおいて開催します。本講座は7回目となるが、例年、中学・高校の英語教員のほか小学校、大学の教員、大学院生など多くの方が近畿圏だけではなく中部、関東などからも参加しています。自治体教育委員会の教員研修のほか、類似の公開講座がかなり増えているにも関わらず、パンフレット、研究科HP、雑誌『英語教育』『言語』でも広報していることから、講義内容の充実が評価され、定員を超える応募があります。

各講師がそれぞれの専門的立場から、教育現場が直面する問題への考え方や対策のほか、IT時代の授業の魅力的な展開の仕方、生徒の理解を深め感動を与える文法や読解の授業のあり方などを、学術的な知見を踏まえ知的に啓発するとともに、教室で応用できる多彩な内容を講義します。運用英語についても最新の音声学的知見（発音生理のMRI動画）や授業で使える発音指導法を示した上で、初級1クラスと中級2クラスに分割してネイティブスピーカーの先生による実践訓練を行います。英語教員の専門的知識の能力開発をさらに充実させる目的で、学習英文法に加え、認知文法、辞書と語法の講義、さらに小学校英語実践の講義を増やし、全体討議では「文法と訳読」の再評価を扱います。このため、開講日が4日にわたりますが、これは受講者のアンケートの要望と変革期にある英語教育の動向に応える措置です。

文責：本公開講座実施責任者 成田 一（言語文化研究科教授）

8月11日（月）

- 10:00～12:30 「転換を迎える英語教育－ゆとりを超えて」
（言語文化研究科教授）成田 一
- 13:20～14:50 「英語らしい発音の科学：ダイナミックメカニズムと訓練」
同 上
- 15:00～16:30 「英作文をどう指導するか」＊
（言語文化研究科准教授）小口 一郎
- 15:00～16:30 「小学校での文法・読解指導実践報告」＊
（立命館小学校教諭）田縁 真弓

8月12日（火）

- 10:00～12:30 「ネット時代における国際英語の統合的実践」
（言語文化研究科教授）日野 信行
- 13:20～16:30 「オーラルコミュニケーション基礎」＊
（言語文化研究科特任准教授）エマ・リア
- 13:20～16:30 「オーラルコミュニケーション」＊
（言語文化研究科外国人教師）トレーン・デヴォア
（言語文化研究科講師）デビッド・マレイ

8月13日（水）

- 10:00～12:30 「英文法研究の英文法指導への応用」 （言語文化研究科教授）岡田 信夫
- 13:20～14:50 「認知的な視点から見た英文法」 （言語文化研究科准教授）早瀬 尚子
- 15:00～16:30 「英語辞書で語法を学ぶ」 （京都外国語大学教授）赤野 一郎

8月14日（木）

- 10:00～12:00 「英文を読む楽しみ」 （言語文化研究科教授）沖田 知子
- 12:50～14:50 「英詩の世界を味わう」 （言語文化研究科准教授）小口 一郎
- 15:00～16:30 「全体討議（質疑&トピック討論：文法と訳読を柱とする教育の再構築）」
- 16:40～17:00 講座修了証書授与式 （言語文化研究科長）金崎 春幸
- 17:00～18:30 懇親会

＊8月11日の「英作文をどう指導するか」と「小学校での文法・読解指導実践報告」、12日の「オーラルコミュニケーション基礎」と「オーラルコミュニケーション」はどちらかの選択です。申込時にお選びください。

〈定員〉 50名程度（先着順）

〈教材作成・連絡郵送費〉 7,000円

〈参加申込み受付期間〉 7月1日（火）～7月25日（金）[期限厳守]

〈問い合わせ先〉 大阪大学言語文化研究科総務係（TEL：06-6850-5855 E-mail：genbunsoumu@ns.jim.osaka-u.ac.jp）

言語文化研究科ホームページ：http://www.lang.osaka-u.ac.jp/lc

（言語文化研究科）



待兼山修学館が登録有形文化財に登録

大阪大学豊中キャンパスの待兼山修学館が、このほど文化庁の文化審議会の議を経て、登録有形文化財に登録され、ブロンズ製の認定銘板の取付が完了されたことを受けて、5月2日(金)に鷺田清一総長及び西田正吾理事・副学長、江口太郎総合学術博物館長、月岡英人理事・事務局長による記念撮影を行いました。

本建物は、昭和6年に大阪帝国大学医学部附属病院の石橋分院本館として建てられ、昭和42年に大阪大学医療技術短期大学校舎、平成5年に大阪大学医学部保健学科校舎として利用され、平成19年8月に改修を実施し、総合学術博物館として再生されました。建物は鉄筋コンクリート造の3階建、延べ床面積は2,378㎡で、西に面し、玄関を中央にしてその南北に両翼がのびる対称形の平面形となっています。博物館への改修に伴い、各所で間仕切壁を撤去し広い空間をつくりだしています。しかし窓などは在来のままで、その外観は創設時のかたちを留めています。

待兼山修学館は昔からその景観美を歌われた待兼山の山腹に建ち、敷地の周りには古墳や火葬墓遺跡などがあります。こうした丘の緑と歴史を背景にして建つこの建物は潤いのあるすぐれた景観を形成し、市街地にも近く市民に親しまれてきました。豊中キャンパスでは、戦前の建物はイ号館と待兼山修学館だけであり、大阪大学の形成・発展を物語る上においても欠かせない建物であり、また学校建築あるいは病院建築としても歴史的価値の高い建物です。



左から月岡理事・事務局長、江口館長、鷺田総長、西田理事・副学長



外観



内部

(施設部、総合学術博物館)

待兼山会館トンカツ&カレー専門店LIBRE (リブレ) 営業開始!!

6月2日(月)から、待兼山会館トンカツ&カレー専門店 LIBRE (リブレ) が営業を始めました。

同店は、食事そのものを楽しむ「食文化」を重視し、一般の学生食堂とは違うワンランク上の専門店として、食事を提供しております。

懇談会、歓送迎会などにご利用いただけるよう、7月からはパーティーメニューやお弁当も提供される予定です。

営業時間：月曜日から金曜日の11時～14時（夏季、冬季の休業日は別途案内）

問い合わせ先：06-6850-6133 又は内線 2001、2002



飛び込んだバンコク生活

国際部国際連携課海外拠点支援係
(バンコク教育研究センター副センター長)

佐藤 真知子

はじめまして。昨年10月より大阪大学が持つ海外3拠点（アメリカ、オランダ、タイ）のうちの1つ「バンコク教育研究センター」（以下、バンコクセンター）にて勤務しております佐藤と申します。バンコクへ赴任して1年も経ちませんが、バンコクで生活をしていて感じたことなどを時系列にご紹介していきたいと思います。



車が行き交うバンコク市内

■ なぜバンコク勤務に？

きっとだれもが一番最初に聞いてくる質問だと思います。日本にいてもバンコクで仕事をしていても必ずこの話題が挙がります。私の答えは一つ「海外で仕事してみたかったから」。きっと何千人という大学職員の中には、こう思っている方も少なからずいらっしゃるのではないかと思います。

私のバンコク行きの話はいきなりやってきました。ある金曜日に上司によれば、週明けの月曜日に返事が欲しいと…実質2日間、家族、友人、あらゆる人に相談しました。でも、最後は「海外で働いてみたい」という思いに素直に従い話が進んでいきました。

話が決まっただけで数ヶ月しかなく、十分なタイの知識、語学力もないまま全く新しい世界に飛び込むことになりました。しかも、私の以前の職場は医学部附属病院医事課でしたので、仕事のことも全く違う内容でした。

■ 初めてのバンコクへ

東南アジアへは旅行で数度来たことがあったものの、タイへ来るのは初めてのことでした。舗装はされているがうっかりしているといつ捻挫してもおかしくないガタガタの道。どこからか臭って来る食べ物のすっぱ臭さ。夜の繁華街で遊ぶ大人達の姿。最初の数ヶ月は仕事への適応というよりも毎日を過ごすだけでヘトヘトでした。そして、何度もカルチャーショックにプチ当たりました。幸い最初の1ヶ月間は妹に滞在してもらっていたのでそのショックも和らげることができましたが…。

女性の私にとって何よりショックだったことは、来て3日目の週末にお隣の部屋で男女がお金を払った払わないのと大声で夜中に喧嘩してほとんど眠れなかったことです。話には聞いていましたが実際に隣の部屋で聞くのは決して

気分のよいものではありません。ただ、今となってはよくある話だということもわかりましたし、話のネタになってしまっています。

■ なんとか仕事をこなす

現在、事務所には4名が勤務しています。関センター長、タイ人秘書のヌーンさん、グローバルコラボレーションセンターバンコク現地代表の石高先生、そして私です。なので事務所での仕事は、日常的な会計から総務的なことまで何でもします。また、大きなイベント「日本留学フェア」（タイ人学生への日本の大学紹介）「バンコク公開講座」（タイに住む日本人への公開講座）などがある時はその準備や広



バンコクセンターのメンバー



日本留学フェア



バンコク公開講座

報的な役割も果たします。そして、またある時はタイに来られた研究者の支援、バンコクセンターを見学に来られたお客様のご案内、空港への送迎などもよくありますのである意味添乗員のような仕事もあります。しんどい時もありますが、タイの中では大阪大学の代表という意識を持ち、大阪大学に対して少しでもよい印象を持っていただこうという思いは常に持ち続けているつもりです。

■ 慣れてきた頃に

しかしながら、気候の違いもありタイへ来て5ヶ月目に熱、腹痛、疲労で2泊3日の入院をしました。医師にお粥しか食べてはダメと言われましたが、海外で一人暮らしをしていてはお粥を作る気力もなく、外へ買いにいても日本人の病人の口に合う食事が売っている訳もなく入院するのが一番手取り早い治療法でした。

でも、タイの病院を見ることができた良い機会でした。タイには様々な人種が生活しているのでいろいろな言葉（日本語、英語、中国語、ヒンズー語、ドイツ語等）を話す先生、通訳がそろっています。そして、ロビーはホテルの待合室のような立派なソファが置かれ、リクエストに合わせてピアノの生演奏までしてくれます。もちろんこれらのことはタイが日本とは違う医療制度をとっているので可能な話ですが、このうちの少しでも大阪大学にもある病院で生かすことが出来れば収入アップにつながるのではとうろかな意識の中、感じました。

■ 生活が落ち着いて

収入アップと言えば、タイの国立大学も次第に独立行政法人化が進んでおり様々な方法で収入アップを図っています。最近、仕事柄よく目に付くのが各大学のインターナショナルプログラムの広告です。つまりは、英語で授業を受けて学位をとりましょう、というプログラムです。これならばタイ人、外国人問わず英語ができれば授業を受けることが出来ます。



駅のインターナショナルプログラムの宣伝

例えば、大阪大学と大学間協定を結んでいるマヒドン大学ではマヒドン経営大学院があり主に社会人向けに夜と週末に授業を組んでいます。1年8ヶ月で経営修士をとることができ、授業料は43万バーツ（150万円）ほどです。生徒の殆んどがタイ人ですが、日本人も今まで20名ほどが卒業しています。

試しに入学説明会に行ってみましたが100名を越すタイ人が説明会に参加しており、タイ人の英語習得への熱さを肌で感じました。教師陣はフランス、中国、アメリカ等、

各国からの先生を揃えており事務の方ももちろん英語で質問に答えてくれました。

その他にも、タマサート大学（大学間協定校）では、5月にインターナショナルカレッジを設立し、外国人が興味を持つ仏教やタイ社会について学べる短期プログラムも用意されています。また、日本の大学でもよく見受けられますがキャンパス内が公園のような雰囲気です。ここで学んでみたいと思わせるような作りにもなっています。

ここで挙げたのはたった2大学ですが、他の大学のインターナショナルプログラムの広告は駅など至るところで見ることができます。どのようにして大学が経営を進め財源を確保していくべきか、タイのあらゆるところにヒントが隠されているような気がします。



タマサート大学インターナショナルカレッジのオフィス



タマサート大学の敷地

■ これから

タイへきて9ヶ月目になる6月、これからの残された任期をどのように有意義に使うべきかよく考えるようになりました。いままでは、目の前にあることをただただ片付けていく仕事しかできていませんでした。少し落ち着いてきた今、能動的に何かをしてみたいと思っています。

最後になりましたが、ここでの勤務が長くなるにつれてどれだけ多くの方がこの勤務を支えて下さっているかが身にしみてわかるようになってきました。この場を借りてお礼申し上げます。そして、そのことに感謝しながらこれからの勤務をこなしていきたいと思っています。

この記事を通してバンコクセンターに興味を持たれた方、アドバイス、ご質問などございましたら admin-bkk@hpc.cmc.osaka-u.ac.jp までお気軽にメールをいただければと思います。

では、皆様のバンコクセンター訪問を心からお待ちしております。

さとう・まこと

プロフィール

国際部国際連携課

職歴：平成15年大阪大学医学部附属病院医事課採用、昨年10月から国際連携課へ異動後、タイへ派遣。

国立台湾大学(台湾)



国立台湾大学（NTU）は旧帝国大学の一つとして1928年に設立された台北帝国大学が母体であり、台湾で最も歴史も古く、また学生数、教員数が最も多い台湾を代表する総合大学としての役割を果たしています。主キャンパスは台北市内南側に位置し、設立以来現在まで、最も優秀な台湾の学生が入学する大学であり、32,233名の学部・大学院生、6,294名の教職員で構成されています。卒業生は台湾の国家機関、地方機関及び民間のみならず、他の国々で活躍しています。科学技術の研究でも優れていて、多くの優秀な人材を輩出しています。例えば、1986年のノーベル化学賞に同大学の卒業生である李遠哲（Yuan Tseh Lee）教授が選ばれております。

NTUでは世界中から多くの外国人留学生在学し、また、世界各国の大学等と交換留学制度や、複数学位制度を運営するなど国際化が進んでいます。世界中の299もの大学と学術交流協定を締結しており、阪大以外の全旧七帝大とも従前から協定を締結していました。

これまで、大阪大学と国立台湾大学（NTU）の間では、部局間学術交流協定〔産業科学研究所—NTU理学部（2005年2月20日締結）、文学研究科及び文学部—NTU文学院（2006年9月12日締結）、工学研究科及び工学部—NTU理学部（2006年10月24日締結）〕に基づき、各部局レベルでの学術交流が行われてきましたが、これらの部局間交流実績をふまえて、学術交流をより一層進展させるために、2008年3月に大学間交流協定を締結しました。

今後、教員および研究者の派遣、学生の交流、交換留学、共同研究、講演会、シンポジウム、学術情報および資料の交換などを大学レベルで行うことによって、両大学が一層発展することが期待されます。

ホームページ：<http://www.ntu.edu.tw/>



編集後記

環境問題は現代社会にとって重要な課題のひとつとなっています。最近は特に様々なニュースでそれを感じるようになってきていますが、本号のクローズアップでは、環境について考える際のキーワードのひとつである「サステナビリティ」が名称に入っている大阪大学の施設及び組織についてご紹介しています。

どこかで耳にしたことはあるけれど、どういう意味なのか、何をするものなのか、恥ずかしながら私もこれまでよく理解できていませんでしたが、SDC等の活動を知ること、この言葉に含まれる重要なメッセージを知ることができたように思います。皆さんはいかがでしょう。

（瀬尾）

法律相談部

「相談者の笑顔のために」

借金、離婚、相続…世の中には様々な法律問題が散在しています。近年、市民が法律に触れる機会は増えたと言われていますが、それでも十分ではない状況です。私たち大阪大学法律相談部は、そんな市民の皆さんの抱える法律問題に対し、相談の窓口となり解決の糸口を探っていくという活動をしています。

当法律相談の特徴はなんといっても「学生の法律相談であること」です。自治体や弁護士会の法律相談のような時間制限は原則として設けておらず、時間を掛けて親身になって相談者の皆さんの話を聞こうと心がけています。

直接相談者と向き合う作業はなかなか一筋縄ではいかないことも多く、難しいというのが本音です。しかしその人の人生を左右する問題ですから、少しでも力になれるよう日々努力しています。回答をした際にほっとした表情になる相談者の方を見ると、この活動をしていてよかったと思



います。一方で、実務での法律の使われ方や実際の解決の仕方など、机の上の勉強では絶対に学ぶことのできない多くのことを学べるので、相談は私たちにとっても貴重な体験です。

春・夏・秋には長期休暇を利用して大規模な法律相談会を開催しています。1日に50件近くもの相談が寄せられ、法律問題で困っている市民の皆さんの多さを改めて実感します。ロースクールが整備され、学生による法律相談の存在意義が問われるところではありますが、まだまだ私たちができることは沢山ある、そう考え相談活動に従事する日々です。



部長 三島京子（法学部3年）

〈コメント〉

私たち学生が行うことで、多くの方に「法律相談」をより身近な存在に感じていただければと思います。



活動場所：大阪府立青少年会館4階

活動時間：毎週土曜日 14：00～17：00

部員数：約80名

連絡先：handai.housou@gmail.com

080-6159-3486 問い合わせ専用

URL：http://housou709.web.fc2.com/

人命救護に対する感謝状授与式挙行

5月20日(火)、豊中キャンパスグラウンドでフットサルサークル「ウエストダッチ」の部員十数名が練習を行っていたところ、ボールを胸でトラップした部員が突然仰向けに倒れ、一時心肺停止状態となりました。

この緊急な事態を察知した同サークルの部員達は、人工呼吸、心臓マッサージなどの救命処置と、豊中市消防本部への救急要請等を行うとともに、通報を受けた保健センターの看護師が「AED」による除細動を実施した結果、心臓の鼓動が開始し、救急車で搬送時には、意識の回復が確認されました。

その後、医療機関に入院しましたが、医師からは、①現時点での後遺症はない、②意識ははっきりしている、③仰向けに倒れたことによる外傷等も無い、④部員達の救命処置とAEDの効果によるものである、とのことでありました。

本学及び豊中市消防本部では、同サークルのこの功勞に対して、感謝状を授与することが直ちに決定され、5月29日(木)に授与式が挙行されました。

特に本学での授与式においては、西田正吾理事・副学長、小泉潤二理事・副学長及び月岡英人理事・事務局長のご列席のもと、鷺田清一総長から感謝状が同サークルに授与され、引き続き、仲間の命を救ってくれたことに対する感謝の辞が述べられたあと、記念撮影が行われるなど、清々しい雰囲気ですべて終了しました。



(学生部学生支援課)

阪大 NOW No.104 2008 6月号

2008年6月20日発行

編集・発行 大阪大学総務部評価・広報課広報・社会連携事務室 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1
TEL: 06 (6879) 7017 FAX: 06 (6879) 7156
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail: soukousyagakukouhou@ns.jim.osaka-u.ac.jp